第3章 不本意な歲月

—都、郷里、都、そして旅

■謝蘇自之惠酒

治平^{じへい}2 (1065) 年、蘇軾^{そしやく}30 歳。

2 月に鳳翔^{ほうしょう}から都に戻った蘇軾^{そしやく}は、判登聞鼓院^{はんとうぶんこいん}（民衆からの陳情に対応するような係）として都で働くことになった。都で職に就くのはほとんどの官員が望むところで、普通なら地方で 10 年以上の経験を積んでもなかなか叶わないものなのだが、制科に合格している蘇軾は特別に優遇されたのだろう。その一方で、弟の蘇轍^{そてつ}は同じ月に初めての官職に就いて都を出た。兄弟が一緒に過ごせたのはごく短い期間でしかなかった。この詩は、同じ蘇姓の人が酒を贈ってくれた（都で職を得たのを祝したと推測できようか）ことに対する謝礼。

「高潔^{こうけつ}な人、〈高士^{こうし}〉は酒を憐れむ」

これは唐の韓愈^{かんい}の説である。

私には別の説がある。

「酒は必ずしも高士を憐れむものではない」

そうじ
 莊子にはこういう説がある。

「酔っ払いには車から落ちて怪我をしない、

それは酒の作用で精神が完全な状態になっているからだ、

とはいえ、天の道を得た方が精神はより完全になる」

これにも私には別の説がある。

「道に達した人、〈達人^{たつじん}〉には欠けるところがないのだから、

どうして、より完全になるのを求めたりしようか」

ある酒飲みはこっそり飲んで酔いつぶれ、

ある酒飲みは飲おとやたらと威勢がよくなり、

ある酒飲みは酒を盗んでまでも飲もうとして役人に捕まり、

ある酒飲みは飲んで死んだらその場にすぐに埋めてくれと従者に^{すき}鍬を荷わせていた。

世間とはかく奇異なことを好み、

そした連中があたかも賢者であるかのように持ち上げる。

唐の杜甫^{とほ}にしても、

詩を得意とする八人の呑兵衛^{のんべえ}を詩に詠み、

酒樽を見るとすぐに涎を流したり、

頭に冠を載せない無作法なことを平気でしたり、

「酔うとは禪に逃れることなり」と言ってみせたりした人を、

あたかも仙人であるかのように称えた。

最も笑うべきことではなからうか。

私はいまこのように思う。

「飲んででも飲まなくても、

心の月は白く輝いて常に全き円であるのがよい。

時に客人があれば酒を酌み、

そうでなければ、酒を強いて去らずとも忘れていればよろしい」

我が一族の蘇先生が深い心で、

百里の遠方からふたかめ二甕のお酒を送って下さった。

そこで私はこう申し上げたい——

「私はお酒はいただきません。世間が同じでも私は異なります」

なんぞと言ってお高くとまるよりは、

同じとか異なるとか論じるのに疎い方がまして、

ごたごた言え言え言えだけ肝心要かんじんかなめのものを失ってしまうのだ。

結局のところ、

酒があるなら辞退しないのがよろしいわけで、

醒めているのと酔っているのとどちらがよいかなどと、

理屈をこねる必要はないのである。

（この詩は、結局のところ何が言いたいのがよくわからないところがある。たくさん
の故事をもとにあれこれ思索する過程を楽しめばよいのだろう。この詩には典拠とす
るものが多数あり、それらをきちんと踏まえた説明を加えるのは煩わしいので、大意

が通じる程度に大まかに訳した)

■夜宿秘閣呈王敏甫

蘇軾はまた試験を受けた。家柄によらない実力社会に必須の要素が試験であると、国家として強く認識したのが宋代の特質で、蘇軾はその申し子であったということもできるだろう。今度の試験は館職かんしょくを得るためのもので、館職とは実際の業務に携わる職掌を意味するものではなく、いわば仮想的な皇帝のブレーン集団の一員であることを示し、館職を授かると、将来は大臣、宰相へと昇る道が開かれる可能性が非常に大きくなる。蘇軾はこの試験にも合格し、館職の中の「直史館」ちよくしかんの一員となった。以来、蘇軾の肩書には必ず「直史館」の3文字が加えられ、並みの官僚とは異なることが一目で知れた。

よいことばかりが続くものではない。5月28日に妻がこの世を去った。妻の助力がなければ鳳翔での3年間はかなり違っていたであろうと推測されるくらいに妻の存在は大きく、妻の死は蘇軾にとってかなりの打撃となった。鳳翔ではあれほどたくさんの詩を詠んでいたのに、都ではこれといった詩がないのはその影響なのだろう。このころの作と推定されているのは次の詩くらいしかなく、これは当直として宮中で夜を過ごしたときに詠んで、王敏甫おうびん ほうという同僚に見せたものだ。

遙か東の海に浮かぶといほうらいさんう蓬萊山や瀛州山、

そこにある神仙の宮殿と同じく、

ここ大宋の皇城は俗世間の塵から遠く隔たり、

皇帝がお好みになる天上界の香りが、

私の宿直する建物にも漂ってきている。

冷たい光が宮殿の瓦に注がれているありさまは、

月光のもとおどりに鴛鴦が伏すかのようであり、

淡い霧が高い楼閣になびいているありさまは、

雲の内におどり鳳がわたかまるかのようである。

夜の更け行くのをここで過ごす私は、

古今の治乱を論じる相手もなく、

ただ一人で少々の酒と向き合うだけである。

隠者の最たる者はあえて山に隠れるまでもなく市中に在るという。

ならば、ここ皇城の内にあっても、

夜空を飛ぶ鶴を見上げ、

暁に鳴く猿の声を聞く情趣は、

味わえないことはないのであろう。

(宮中を仙界に譬えるのは詩における一つ約束事のようなもので、この詩は精彩に欠けるようだ)

■妻王氏墓誌銘

治平^{じへい}3 (1066) 年、蘇軾^{そしよく}31 歳。

妻の死から1年も経たないこの年の4月25日に父の蘇洵^{そじゆん}が亡くなった。蘇軾は妻と父の棺を船に載せ、弟とともに郷里に帰り、2人を葬った。妻の王弗^{おうふつ}の墓誌銘を蘇軾自身が書いた。

治平二年(1065)五月二十八日、趙郡^{ちやう}の蘇軾^{おう}の妻王氏は都で死去した。その七日後、都の西で仮に棺に納めた。翌年の六月、眉州^びの東北の彭山^{ほうざん} 県安鎮^{あんちん} 郷の可竜^{かりゅう} 里にある母の墓所の西北八歩のところに埋葬し、私蘇軾がこの墓誌銘を記した。

君^{いみな}の諱^{ふつ}は弗。眉州^{せいしん}の青神^{せいしん}の人で、郷試^{おうほう}に合格した王方^{おうほう}の娘として生まれ、十六歳で軾のもとに嫁いで来た。子は邁^{まい}がいる。

君は嫁す前には、君の父母に仕え、嫁してからは我が父と母に仕えた。いずれのときも謹肅^{きんしよく}との評判を得た。

嫁したその初めは、書物を知るとは自分からはひと言も言わなかった。軾が書物を読むとき、君はずっとそばにいて、音読するのを聞いていた。理解しているかどうかはわからなかった。その後、軾に忘れたところがあると、君はすぐに思い出させてくれた。他の書物について尋ねてみると、どれもおよそのことを知っていた。それで君が賢く慎ましやかであると知った。

軾が官職を得たのに伴って鳳翔に来てからは、軾が外で為すことを、君は問う

ともないのに詳らかに知っていた。

君はこう言った。

「あなた様はいまお父様から遠く離れています。よくよく慎まなければなりません」

君は、我が父が私を戒めた言葉を日々に語ってくれた。

軾が客と外で話すのを、君は壁の向こうで聞いていて、客が帰ると客とのやりとりを再現してこう言った。

「あの人はいつもどっちつかずのことしか言いません。あなた様がどう思っているかを見て、それに合わせようとしているだけです。そのような人の言うことは聞くに値しません」

あるいは、軾と一生懸命に親しくなろうとしている人がいると、君はこう言った。

「あの人とはきっと長くは続かないでしょう。すぐに意気投合するような人は、離れるのもきっと速いのです」

いつも君の言った通りになった。

君が亡くなるまでの一年の間、思えば耳を傾けるべきことがたくさんあった。見識豊かな人と同じであったのだ。

君が死去したのはまだわずかに二十七歳であった。君が死去すると我が父はすぐに軾に次のように命じた。

「君の妻が君の艱難に従ったことを忘れてはならない。いつか必ず君の母の近くに埋葬するのだ」

それから一年で我が父は亡くなり、軾は謹んで我が父の遺令に従って君を葬っ

た。

君はこの墓地で我が母にまみゆることとなった。私は我が母に会うことはできない。ああ、哀しいことである。私は永く母に仕えることができずにいる。君は死んだとはいえ、我が妻としての勤めを為すことができる。だから傷まずともよいのか。ああ、哀しいことではないか。

(冒頭に「趙郡の蘇軾」とあるのには少々理由がある。父の蘇洵が先祖の事績を調べ、その名がはっきりと知れたのは蘇軾から5代前までであったことは第1章38ページで見たが、そのまた遠い祖先は、^{そくてんぶこう}則天武后(中国史上唯一の女帝)の時代に宰相となつた^{そみどう}蘇味道に遡るとした。蘇味道は文名は高かったものの、政治家としての評判は芳しくなく、則天武后の時代が終わると都を追われて眉州に左遷された。その子孫がそのまま住み続けたのが眉州の蘇一族の始まりだというのだ。蘇味道は^{らんじょう}趙州樂城県の出身であったので、蘇軾は時として「趙郡の蘇軾」と称し、弟の蘇轍は自分の詩文集に「^{らんじょう}樂城集」と名付けた)

■蘇廷評行状

蘇軾と弟の蘇轍は、父が亡くなってから足掛け3年の喪に服した。服喪期間は悲しみにひたるだけというのが孝の原則で、^{おおやけ}公の仕事から完全に離れ、詩を詠むこともなかったようだ。一方で、父母や先祖の事跡を記録に残そうとし、都を去る前に、父の墓誌銘を恩人の^{おうようしゅう}欧陽脩に、母の墓誌銘を^{しほこう}司馬光に依頼し、それぞれ資料を提供して書いてもらった。

(母の墓誌銘は第1章70ページですで見ただので、ここでは歐陽脩が記した蘇洵の墓誌銘を見ておこう。

しよく 蜀に一人の君子がいて、そ 蘇君といった。いみな 蘇君の諱は洵、あざな 字は明允、めいじん 眉州眉山の人である。

蘇君は義を行い、一家をきちんと修め、郷里の人々に信望があり、広く蜀において知られることとなった。

おうようしゅう 私歐陽脩は、蘇君が二人の息子、そしよく 蘇軾とそてつ 蘇轍を連れて上京した際に、蘇君が書き著した文章二十二篇を得て、朝廷の人々に配った。皆は争うようにしてそれを次々に別の人に読ませようとした。二人の息子は(科挙の)進士科に及第し、しかも成績は上位だった。二人の息子の文章もまた世に称賛されることとなった。

眉山は都から西南に数千里の彼方にあり、蘇君父子の名はその地に隠れていたのが、一日にして都の人々に知られることとなり、父子三人の文章はついには天下を席卷するに至った。

蘇君の文章は広い知識に裏打ちされ、力強く、普遍性があり、読む者はぞくぞくと恐ろしいばかりに感じて、これは一体どのような人が書いたのだろうかと思像せずにはいられなくなる。ところが、実際に蘇君を見ると、あまりぱっとせず、とても鋭いことを言いそうにない。話をしてみても、一緒にしばらくいると、次第に敬愛すべき人だと思えてきて、ふともらず言葉にはおぼろげなところがあり、ならばと問うと、尋ねれば尋ねるだけ無限に答えが返ってくるようになるのである。

じゆんめいとくじつ ああ、この蘇君こそは純明篤実の君子というべきである。

蘇君の曾祖父を蘇祐そゆうといい、祖父を蘇杲そこうといい、父を蘇序そじょという。三代にわたって世に顕れることはなかった。蘇序に三人の息子があり、蘇澹そたん、蘇渙そかん、蘇洵そじゆんといい、蘇渙は進士に及第した。

蘇君は勉学を好まず、壮年に至っても書物を手に取ることがなかった。父はそのような蘇君を自由にさせていたので、郷里の親族は誚しく思い、どうして放置しておくのかと、ある人が尋ねた。父は笑って答えなかった。蘇君もまた気にすることがなかった。

蘇君は二十七歳になると、突如として発奮し、それまで付き合っていた連中と交わりを断ち、家に籠って書物を読み、文章を書く練習を始めた。歲月を積んで科挙に挑み、二度落第した。制科にも挑んで失敗し、故郷に帰って、こう言って嘆いた。

「受験のための勉強は学ぶに値しない」

それまで書きためた数百篇の文章を全て燃やし、門を完全に閉ざして書物を読み耽り、数年の間は筆を持たず、文章を作ることはなかった。儒学の經典、諸子百家の著作等々を大いに究め、古今の治乱成敗は何によるのか、聖賢の窮達出処の機微はどこにあるのかを考え抜き、その本質を把握し、溢れるほどに知識を蓄えても、なおそれを抑えて、内より外に出すことはなかった。

長い時間を経て、あるとき、

「もうよからう」

そのような思いがふとよぎると、筆を手に持ち、たちまちにして数千字の文章が生まれた。書けば書くほど、縦にも横にも、上にも下にも自由自在に動きまわって、出では入り、速く駆け、速く駆け、必ず深くまた細微なところに至って初めて止まるのだった。

思ふに蘇君の才能は豊かで、その発露が遅かったのは慎ましかであつたからで、ひとたび時機を得るや、真髓を掴み取つたのである。

蘇君が都に来ると、人々は一斉にその賢を尊び、その文章を規範とした。父子三人が揃つて名を知られたことから、特に「老蘇」と呼ばれるようになった。

始めに私は蘇君の文章を皇帝に差し出し、紫微閣の一員に招こうとしたのだが、蘇君は辞退した。そこで秘書省校書郎の職を用意した。たまたま宋朝が始まって以来の礼に関する書物を編集する作業が始まっていたことから、蘇君は霸州文安県主簿という名目上の職に就いた上で、その編集作業に従事し、『太常因革礼』一百巻を完成させた。ところがその書を皇帝に差し出して労が報われる前に、蘇君は亡くなってしまった。没したのは治平三年四月 戊 甲、享年五十八であつた。皇帝はそれを聞かれると哀れみ、光祿寺丞の名譽職を贈り、公費で船を用意させ、その棺を載せて蜀の地に葬るように命じた。

蘇君は程文応の娘を娶り、三人の男児が生まれた。長男の景先は早くに亡くなり、次男は軾、三男は轍である。三人の女兒が生まれたが皆早くに死んだ。孫は邁と遅がいる。文集二十巻と『謚法』三巻がある。

蘇君は人とよく交わり、人の危難をよく救い、ある人が死んで孤児が残つたときには憐れんで養つたので、村の人々は蘇君には徳があると称えた。

蘇君は最後に『易経』を好み、

「『易経』は深遠な書物で明らかになっていないところが多くあり、これまで学者は牽強附会の説を出して混乱させるばかりであつたので、それを取り除くことで聖人の本来の主旨が明らかになる」

と言って、『易伝』という著作に取り組み、しかしまだ完成に至らなかった。

治平四年十月 壬申、蘇君は彭山の安鎮郷可竜里に葬られた。

蘇君は遠い田舎に生まれ、学問が成るのが遅かったことを常に嘆いていた。

「私を知る者は、ただ吾が父と、歐陽公だけだ」

だから私以外に墓誌銘を書く者はいないのだ。

その銘に曰く、

蘇氏の先祖は唐の世に顕れた。それは樂城の人で、官の仕事で眉州に来てそこに留まり、子孫が繁栄して、曾祖父のころから郷里においてその仁徳が称賛されるようになった。偉大にして明らかな蘇氏の才は蘇君に至ってその文章において大いに発揮された。蘇君には文章があり、さらにその子があった。朽ちることのないものを遺し、その子孫はいよいよ盛んになるだろう。ああ、君の字は明允、その通りに明らかにして亡びることはないというべきである。

(蘇洵の兄の蘇渙の伝記は、第2章 114 ページですで見たと同じように、後に蘇轍が書いている)

蘇軾は服喪期間中に祖父の蘇序の伝記を書いた。

公の諱は序、字は仲先、眉州眉山の人であった。その先祖は趙郡の樂城からきたようだ。公の曾祖父を蘇鉞といい、祖父を蘇祐といい、父を蘇杲といった。その三代はともに官に仕えることはなく、皆世に隠れた

徳があった。曾祖父の代から、義を為し施しを好んだことで郷里に知られ、公に至ってますます評判が高かった。しかし公は、自分は先祖に及ばないと思っていた。

公の父は唐王朝の末に生まれ、周王朝の^{けんとう}顕徳年間に亡くなった。その頃、蜀の地では、^{おう}王氏と^{もう}孟氏が順に皇帝を称していたが、公の父はその朝廷に仕えることはなかった。

公の父はかつて蜀の都の^{せいと}成都に遊び、ある道士に出会った。道士は人を遠ざけて公の父だけにそっとささやいた。

「若い人よ、君には優れた徳がある。わしと君にはある縁がある。わしは百物を変化させる薬方を会得した。世が乱れてもこの薬方があれば自分の命を全うできるだろう」

そう言って、その術を授けようとした。

公の父は笑い、

「僕はそれを学ぼうとは思いません」

道士は驚き、

「わしは天下を往来し、誰にもいまのようなことを語ったことがない。わしは何でも分かっていると思っていたが、君が学ぼうとは思わないと言ったのはまことに思いもよらなかった」

道士はそう言って去り、それっきり会うことはなかった。

公は若いときから、大らかで小さなことにこだわらず、本を読んで大略

がわかればそれでもう閉じてしまった。人より一步下がり、施しを好み、人が危難に遭遇すると、自分自身に対してする以上の面倒を見た。衣食に少しでも余裕があると、人のためにすぐに使い、たちまちにしてなくしてしまうのだった。それでいつも困窮し、しばしば飢えと寒さに困らされた。それでも一度も悔いることはなかった。施して残りがあると、「これは困っている人のための使い余しだ」

と、いよいよ惜しむことはなかった。

ある凶作の年に、公は農地を売って飢民を救った。豊作の年が巡りくると、助けられた人は公のために農地を買い戻そうとした。公は言った。

「私はもともと売りたいから売ったまでだ。そなたのために売ったのではない」

公は、知り合いであろうがなかろうが、人とすぐに打ち解け、笑って腹藏のない話をした。つまらない人間が公を侮り欺いても、怒ることがなかったのも、人々は不思議に思った。

宋の統治が蜀に及んだ初めに、李順^{りじゅん}が反乱を起こし、眉州は反乱軍に攻囲された。公はこのとき二十二歳で、武器を手に城壁の上で戦った。反乱軍の攻撃がいよいよ厳しくなったときに、たまたま公の祖父が病気で亡くなり、家族は泣くばかりでどうしたらよいのかわからなかった。公だけは落ち着いて死者を送る礼を尽し、そのありさまは平和なときと変わらなかった。祖母がひどく気落ちしていたので、公はごく穏やかにこ

う言った。

「朝廷が民を見捨てることはありません。賊は必ず破れます」

実際に反乱はすぐに収まった。

その後の慶暦年間けいれきに、皇帝は州や郡に対して学校を建てるよう詔を下した。蜀の人々は、朝廷が蜀の人を採用してくれるようになると喜び、学校ができたなら自分の子弟を真っ先に入れようと待ち構えた。

公は笑って、

「お偉いさんが格好を付けたいだけのことだ」

と言い、子供等が入学しようとしても止めた。

このころ郡吏は横暴で、民を苦しめたので、公はそれを批判する詩を作った。

子の蘇渙そかんが朝廷に仕え、公は大理評事という名誉職を授かった。慶暦七年五月十一日に家で亡くなった。七十五歳だった。八年二月に、眉山びざん県しゅう修文郷安道里ぶんきやうあんどうりの先祖の墓の近くに葬られた。職方員外郎を贈られた。

史し氏を娶り、史夫人は公に先立つこと十五年で亡くなった。公が亡くなったときに、蓬萊ほうらい県たいくん太君を贈られた。

三人の男子がいて、長男が澹せんで、官に仕えることなく、公に先立って死んだ。

次男が渙で、科挙に合格して官員となった。渙は赴任したところで必ずよい評判を挙げ、任地から去ると、人々は渙を偲んだ。ある人は、渙を

漢の時代の優秀な官吏になぞらえた。利州の任地で官職に就いたまま亡くなった。

三男が軾の父、諱は洵である。洵は霸州文安県主簿で終わった。

渙が蜀の閬州あうの知事になったときに、眉州からほど遠くないことから、公はその仕事ぶりを見に行った。渙がきちんと正しくしているのを見て喜び、数日間そこに滞在した。閬州の人々は、公が賢人であるのを見て喜んだ。

公は晩年に詩を作るのを好み、巧みであることは求めず、いつも即興で、自分の思いをそのままに詠んだ。亡くなったときには数千首の詩が遺された。

娘が二人いて、長女は杜垂裕とすいゆうに嫁ぎ、次女は石揚言せきようげんに嫁いだ。男子の孫が七人いて、位、份、不欺、不疑、不危、軾、轍という。

唐が滅んで五代の乱れた世になったとき、蜀では学問をする者が少なくなり、学問をしても郷里に留まって敢えて出仕しようとはしなかった。公がその子の渙に学問をするよう命じると、学んで至らないことはなく、渙はついに進士に及第した。渙が官員となって郷里に帰って来ると、土地の人々は皆で出迎え、その栄えある姿を見て、蘇の家の子に見習って学問をするよう子供等に教えた。これより眉山県では学問をする者が千余人にまで増えたのである。

しかし、軾の父だけは学問に目を向けず、壮年に至っても書物を手にす

ることがなかった。公はそのような息子に何も言わなかった。ある人が「どうして放っておくのですか」と問うと、何も答えなかった。しばらく後になって、

「息子は学ばずにはいられなくなるだろう」

と、言った。すぐにその通りになり、軾の父は学問に努め、ついに世に名を顕した。

公に見識があり、人に施すことは郷里の間で知られていたが、世の中で大きな仕事をしたわけではなかった。特に幸運を得ることはなく、世間にその名が聞こえるようなこともないままに老いて亡くなった。しかし、その功名は小さなものであったのだろうか。

古の賢人、君子にも、やはり名が顕れることなく、世に伝えられることがなく終わった人達がたくさんいた。我々が知るのはごくわずかな者だけだ。公に伝えられることがないのは、ただ公が僻遠の地で一生を過ごしたからだけではなく、その子孫が公のことを人に語ろうとしなかったからだ。だから、その始めから終わりについて、為したことの大概をここに記録し、もって当世の君子にお見せするものである。

■外曾祖程公逸事

この文章はずっと後年になって書かれたものだが便宜上ここに訳出しておく。母の祖父の程仁ていじん覇の一つのエピソードを記している。

公の諱は仁覇、眉山の人である。仁者で、郷里の人々に厚く信頼されていた。

蜀の地が宋朝の統治下に組み込まれたとき、都の人々は遠くまで赴任するのをいやがり、そのために蜀では官員が不足した。そこで、地元の人間できちんと仕事のできそうな者を選んで臨時の官職に就けた。公もその一人となり、眉山県の参軍という職に就いた。

盗賊を捕えるのが役目の尉じゆうの職にある者が、ある盗人を掴まえた。盗みをしたのは確かで、たまたま持っていた刃物で誤ってその家の主人を傷付けてしまっていた。そこで、県尉はその盗人を、強盗殺人を繰り返す極悪人に仕立て、自分の手柄を大きく見せて褒賞を得ようとした。県尉は獄吏と組み、盗人に拷問を加えて目論見通りに白状させた。

県知事の判決がこれから下されるときに至って、盗人は役所の廊下で泣き続け、その衣がぐしょぐしょに濡れるほどであった。そこに公が通りかかり、話を聞いて、これは冤罪であると知った。

それで盗人に言った。

「おまえは、これは冤罪であると知事に訴えろ。そうしたら、私がどうかしてやる」

盗人が言われた通りにすると、公が脇から力を添えたので、知事はもう一度調べ直すよう命じた。

公は冤罪であると主張した。しかし、県尉と獄吏は徹底して争い、とうとう盗人は死刑になってしまった。そのために公は官職を失い、郷里に帰った。

それから一カ月の内に県尉も獄吏も急死した。

さらに三十余年後、公は白昼、そのときの盗人が庭先に座ってこちらを拝んでいるのを見た。盗人はこう言った。

「あっしはあれからずっと閻魔様の前で県尉と獄吏と白黒争ってまいりましたが、やつらはいまだに自分達の罪を認めようとしません。あっしはあなたさまのお越しを待って決着を付けようと思っていました。閻魔様は早くにあなたさまを呼んで、結論を急ごうとしましたが、あっしは『我が恩人を驚かせたくない』と反対しました。しかし、今日に至ってあなたさまの御寿命が尽きることになりましたので、あっしはあなたさまを閻魔様のお裁き場へとお連れしたいと思います。お裁きが終わりましたら、あなたさまは必ず天に昇られ、御子孫はきっと繁栄いたしましょう」

盗人は消え、公は見た通りを家の者に告げると、沐浴し、正装して横になり、そのまま亡くなった。

私蘇軾は幼いときにこの話を聞いた。そのときはすでに曾祖父は九十歳で亡くなった後だった。

■四菩薩閣記

熙寧元(1068)年、蘇軾33歳。

この年の7月に喪が明けると、親類に勧められたのだろう、蘇軾は王介おうかいの娘の王閨之おうけんにしの後添いとして娶った。最初の妻の王弗おうふつと同族の娘である。妻が亡くなった後に、その妹や従妹と再婚するのはかなりよくあることだった。

10月に、蘇軾がかつて父にプレゼントした画を納める建物が完成し、それを記念するこの文章を記した。

私の父は元来、物の好みがなく、何もない部屋であたかも齋戒しているかのよう
に静かに過ごし、ときたま言笑するだけだった。それでも画だけは好み、父の門弟
は父を喜ばすのが難しいので、父の好みそうな画を持って来て、どうにかして父の
喜ぶ顔を見ようとした。それで、父は庶民でありながら、公卿のようにたくさんの画を
所蔵するようになった。

かつて長安に、唐の玄宗皇帝げんそうが建てた仏教の經典を納める堂があった。四方
に扉があり、八枚の扉の板に呉道子ごどうしが画を描き、表側には菩薩ぼさつが、裏側には天
王てんが描かれ、全部で十六体の像があった。唐末に黄巢こうそうの乱に遭い、賊の放っ
た火がその堂に迫った。その名は忘れてしまったが、ある僧が、兵火の中から四
枚の板だけを抜いて逃げた。ところが、重いし、うまく背負うこともできなかったので、
賊に迫られて全部を失ってしまうのを恐れ、二枚を荷台にして二枚を運び、西の

ほうしょう

鳳翔にまで逃げた。とある僧舎に身を寄せ、板をそこに留め、それから百八十年が経過した。この板をある商人が十万銭で得て、私のところに見せに来た。私はそれを手に入れ、父に贈った。父の手元にはすでに百余りの画があったが、この四枚の板を手にしてからは、これが一番であると思うようになった。

治平四年、父は都で亡くなり、私は都から船で汴河べんがを下って淮河わいがに入り、さらに長江を遡って郷里に帰った。そのときに四枚の板も船に載せて持ち帰った。

服喪の期間を終えると、いつも親しくしている僧の惟簡いかんがこのようなことを言った。

「愚僧は、師よりこのようなことを教わりました。故人が最も大切にしていたものを惜しまずに喜捨するのが最も功德のある行為です」

私はその説を用い、父が最も愛していて、私が捨て去るに最も忍び難い物といえ、四枚の板以上の物はないので、それを寺に喜捨することにした。

そこで惟簡に向かってこのように言った。

「これは唐の皇帝が守り切れず、賊によって焼かれてしまいそうになりました。まして私などが守れるはずがありません。天下にたくさんの物を蓄えている人を見ますに、三代にわたって守れた者がどれだけいるのでしょうか。そもそも始めは、それが欲しくてもなかなか得られないのを苦しみ、得てからはただただ失うのを恐れます。それなのに、その子孫に至ると、衣食に替えずにおくことは稀です。私は自分で考えるにこれを長く守ることはできませんので、貴僧に差し上げようと思います。そこで伺うのですが、貴僧はこれをどのようにして守るお考えでありますか」

惟簡はこう言った。

「我が身に代えて守りましょう。我が眼を潰されても、我が足を切られても、この画は決して奪われないよう守ります。このようにすればよろしかろうかな」

私は言った。

「それでは十分はありますまい。貴僧が生きておられる間だけしか守れないではありませんか」

惟簡は言った。

「御仏にお願いし、鬼神に守ってもらいましょう。これを取って人に与えようとする者は仏法によって罰せられます。このようにして守るのならばよろしかろうかな」

私は言った。

「それでも十分ではありますまい。世には仏を信じない者、鬼神を蔑む者がおりましょう」

「ならば、どのようにしたら守れるのでしょうか」

「私が貴僧にこれを与えるのは、父のために喜捨するのです。天下には父のない子はいません。父のためであると知って、取ろうとする者がいるでしょうか。もしそうだと知っていながら、画を見るだけでなく、自分の欲を叶えようと取ってしまうのは、その愚さにおいて、黄巢の乱で焼いた賊と同一であります。それほど愚かであれば、子孫が生きながらえるのは難しく、まして画を所蔵し続けることなどできるわけありません。取るか取らないかは人によるとしても、貴僧に託すこの画はそもそも取ることのできない物なのです。貴僧はこの画を守るために何を勉めたらよいのかといったら、取ってはならない物であると、そのことを示すだけでよろしいのでは

ありませんかな」

こして惟簡に画を与えたところ、惟簡は百万銭で大きな建物を作って画を内に納め、その上に我が父の画像を置いた。私はその費用の二十の一を負担し、翌年の冬までに完成することを期待した。

かくて熙寧元年十月二十六日にこのように記した。

■和董伝留別

きねい
熙寧² (1069) 年、蘇軾 34 歳。

先の文章を記した直後に、蘇軾と弟は眉州を発って都に向かった。故郷を離れるに際し、先祖の墓所の管理など、蘇家のこと一切を蘇渙の息子たちに託した。そのときには全く予期しなかったのだが、それ以降、蘇軾は故郷には戻れなかった。

今回の眉州から都への旅は、第 1 章で見た長江を下るルートではなく、陸路、ほうしやう鳳翔からちやうあん長安を経由する北回りのコースをとった（10 年余り前に父に連れられて科挙を受けに都に上ったときと同じ）。官員としての最初に赴任地であった鳳翔では大勢の人に歓待され、長安でもせきそうじよ石蒼舒やおう王頤を初めとして数多くの人々と会った（第 2 章 118 ページで見た「酔道士図」の跋文を書き足したのは今回の訪問のときである）。

長安で新年を迎え、出発しようとしていたときに、とうでん董伝がみすばらしい姿で訪ねてきた。その董伝の詩に和したのがこれである。

(董伝とはかつて鳳翔時代に面識があった。董伝は科挙を目指していて、自作の詩文を見せて蘇軾の指導を仰ごうとした。その作風は極めて古風で、蘇軾の文学観とは合致せず、杜甫とほの詩を学ぶよう助言した。

今回都に向かう途中で鳳翔に立ち寄った際に、董伝が父を喪い極貧の内にあるとの噂を耳にし、董伝の郷里に人ぼせいけい(恐らく馬正卿)を送って弔意を伝えた。

董伝は蘇軾の前に姿を現すと、自分は間もなく韓琦かんきの推薦によって朝廷に出仕できるとか、そのことを聞き知った大金持ちが媚にしてくれるとか、およそ不可解なあれこれを並べた。韓琦は元の宰相で、先頃皇帝が代替わりして政情が大きく変化したのに伴って朝廷から外に出てちょうど長安にきていて、蘇軾も年末に会っていた。いまの韓琦の立場からして、無名の人物を朝廷に推薦するとは全く考えられないことだった。蘇軾は董伝の話が無下には否定せず、別れ際に董伝を励ますこの詩を渡した)

たとえ身には粗末な衣服を纏って生涯を送っても、

詩文を納めた腹の内はいつでも華やかである。

行く行くは落ち葉を拾い集めて豆を煮て暮らすような老学者となるのを嫌い、科挙の合格者の中に身をまじえて春の花盛りを満喫しようとした。

しかしながら、春の野を駆け廻る馬を用意する銭が懐になく、

婿選びをする大官が目を止めてくれないかと虚ろにあたりを見回した。

我が意を得られさえすれば、きっと世間に誇れるはずだ。

朝廷に召そうと、黒々と記された詔書が必ずや届くであろう。

(その後、都に着いて間もなく、董伝は死んで、遺された家族は貧窮のために葬ることさえできずにいると、その地の役所から蘇軾に知らせてきた。遠い都にいては何もできないので、蘇軾は韓琦に支援を請う手紙を書いた。その手紙では、董伝が生前話っていたことを(貧苦の余りの妄想と疑いつつも)、事実として認識しているようなそぶりで記している)

■送任伋通判黄州兼寄其兄孜

蘇軾と弟は2月に都に着いた。ちょうどそのとき王安石が副宰相になり、神宗皇帝のもとで国政の大改革が本格的に始まろうとしていた。

(神宗皇帝は、蘇軾が喪に服している間に20歳で即位し、先々代の仁宗皇帝の頃から先送りになっていた種々の問題を一気に解決しようとの強い意志で国政に臨み、王安石を大抜擢した。朝廷の重臣連中(韓琦や富弼といった人々)は王安石と意見が合わず、続々と朝廷を去って行った)

(蘇軾と弟は、都に着いた当初、神宗皇帝と王安石からは改革を担う若手官僚の一員となることを強く期待され、蘇軾は皇帝の秘書集団の一員に加えられ、蘇軾は改革を実施するための法案を詳しく検討する部署に配属となった。改革について詳しく知ることにつれて2人は種々の疑問を抱くようになり、兄弟それぞれの視点から問題点を指摘し、次第に改革に反対する中心人物と目されるようになった)

この詩は、改革に反対する意見をまだそれほど述べていなかったころに、郷里の先輩の任伋が都を出て行くのを見送ったときのもの。任伋は兄の

にんし
任孜とともに科挙に合格し、郷里の偉人として「大任」、「小任」と呼ばれていた。この詩には兄の「大任」へのメッセージも込められている。なお、10年余り前に「大任」に会ったときの詩が第1章12ページにある。

にんこう
任公兄弟は我が州の豪傑である。

若かり頃は、一日に千里を走る馬のように意気盛んで、
人脈など不要と、我が道を歩んだ。

残念なことに、要路の誰かに知られることなく、
その才能が十分に活かされないまま老境に達してしまった。

小任公とはこの前お会いしてから十年、

いまま学び続けて万卷の書を読破し、

その詩はますます美である。

これから行かれるこうしゅう黄州は峡谷に挟まれた小さな郡で、
葦原や竹林の中に、茅葺屋根の家が数軒ばかりあるという。

どのようなところに置かれても、

己の天命を知る者は憂いたりしないものだ。

恥じなければならぬのは賢人を推薦しない者どもだ。

へいせん
平泉県におられる大任公はさらにうら悲しいといえようか。

六十歳にしてなお書生のような貧乏暮らしだ。

かつて民衆から慕われた地に葬られるのならそれで十分とひそやかに願うのか、
それとも、もはや誰に遠慮することなく振る舞うべきなのか、
一生の終わりどころを考えておられることだろう。

小任公に託して大任公に我が思いを伝えたい。

獐猛な鷹に向かって、俺にだって爪があると、
威勢を張るようなことだけはなさいませんように。

(任兄弟が不遇であるのは、改革に対する姿勢も影響していたのだろうか。この詩から、蘇軾は「獐猛な鷹」に立ち向かう決意を固めつつあったと読み取ることも可能だろう)

■秀州僧本瑩静照堂

この頃は政治的抗争が激化する前でまだ精神的な余裕があったようで、
このような詩もある。秀州しゅうから都みやこにきた慧空えくうが、静照堂せいしょうどうを建て、その意味するところを（さも自慢げに）語ったのを聞いて。

鳥は囚われても飛ぶことを忘れない。

馬は繋がれても走ることをいつも思っている。

貴僧は堂に「静照」の名を付け、

静かに身の内を照らし見ることの意義を説く。

鳥や馬は、静の中に置かれてじっとしていられるだろうか。

飛びたい走りたいとの思いに任せるのがよいのではなからうか。

世間の人は俗事はわずらわしいと言う。

しかし、俗事がなければ不で悲しく思うものだ。

世間の人は貧乏は身を疲れさせるので勤弁だと言う。

しかし、富貴になればなつたで精神を消耗させるようなことがあるものだ。

貴僧は「静照」を誰と一緒に実践したいのか。

市井に隠遁して、このまま老いて死んでも悔いはない、

何より楽しいのは、小さな舟を浮かべ、それに身を任せることだ、

などと言う人達か。

そう言っている者だって、

時が巡りくなら世に何かしかの働きをしたいと思っていたりするものだ。

それは貴僧がいう「静照」の仲間ではないだろう。

まして私に向かって説いても何にもならない。

(原詩はこれほど露骨ではなく、慧空に敬意を表していると読むこともできる。蘇軾には、人によって受け止め方がかなり異なるであろうような、ユーモアなのか皮肉なのか、微妙とかむしろ危険な表現をしてしまうところがある。言わずもがなの言葉が発して人を怒らせ、怨みを買うことが少なからずあった)

■石蒼舒酔墨堂

都にくる途中の長安で、せきそうじよ石蒼舒と会っていたのだが、しよ石蒼舒は書の収集

家で、集めた書を納めるための建物をかねてから作っていて、それが完成して「すいぼくどう酔墨堂」と名付けたと手紙に記してきた。それへの返事の詩。

人の一生で、憂い患うことが始まるのはいつなのか。

それは、字を知ったときである。

だから、自分の姓と名がまぼ書けるようになったら、

字を学ぶのはもうやめるべきなのだ。

まして、草書の速さを誇るなど何の意味もない。

見る人の口をあんぐりと開けさせ、

どう読んだらよいのかと困らせるだけだ。

わかっているながら、私も草書をとかく速く書きたがり、

おかしなことをしていると自分で笑ってしまう。

貴公も同じ病で、いつ治るとも知れない。

何しろ貴公はこのように言っている。

「草書ほど楽しいものはない。

心が一切何物にも捉われない最高の境地と同じだ」

貴公は近頃、堂を建てて「酔墨」と名付けたという。

美酒を飲んで百の憂いを消すくらいに、

墨を用いるのは素敵だという意味なのだろう。

蓼食う虫も好き好きで、

泥や炭が御馳走に感じられてしまう病気があとと聞く。

貴公が書を好むのは、なるほどそういうもので、
もしかするとそれどころではないのかも知れない。

何しろ貴公が使い古した筆は一つの丘を作るくらいになっているし、
貴公が興を催して筆を揮ったならば、
駿馬が走り出してたちまち中国全土を踏破してしまうような勢いで、
瞬時に何百枚もの紙が費え去ってしまうのだ。

私はというと、その書には型に基づく法則性はなく、
点や画はただ手の勢いによるので、
読む人にああでもないこうでもないと思わせさせてしまう。

そんなものであるのに、貴公は評価してくれて、
紙の切れ端に書いた一字だけでも欲しいと言ってくれる。

貴公は、昔の草書の達人に並ぶほどだが、
私は、自分一人でうまいと誇って、世の人の首をかしげさせる下手くそ名人だ。
要するに、池いっぱい墨を使い切るような努力をしていないのだから、
絹などは字を書くために用いるのではなくて、
布団に詠えた方がよっぽどよいのである。

■王頤赴建州錢監求詩及草書

長安で会った王頤が都おうきにきて、建州けんで錢を鑄る仕事をするよう命じられ

てすぐに出て行った。別れ際に蘇軾に詩と草書を求めた。王頤もまた書の愛好家であった。

(地方官は任期を終えると一度都に戻って在任中の業務を報告し、その後で次の職を与えられるのを待った。運が悪いと、懸命に就職運動をしても仕事にあぶれた。宋は科挙の制度を整備し、優秀な人材を官僚組織に取り込むことに成功し、それは国家の安定化にすこぶる役立った。野に大勢の不满分子を残さないよう、科挙では本来必要とする数よりもやや多めに合格させ、同時に官僚のポストも増やした。ポスト数のいたずらな増大は国家財政を圧迫するまでになったのだが、それでも官職に就きたいとする希望を満たすには不足していた。王頤の場合はすみやかに次の職を得られたのだが、不本意なところもあったようだ)

貴公と初めて知り合ったのは長安に近い武功^{ぶこう}県だった。

冬の役所に泊まって樽酒を傾け、

酒^{たけなわ}闌にして灯が尽きてしまったのだけれど、

それでも話は尽きなかった。

従者は立ったまま眠りこけ、ぼったりと屏風を倒した。

貴公は、不死の奥義を学ぶべきだと、熱心に私に説いた。

瞳が四角い仙人から授かったその奥義を聞かせてくれたのだが、

私は心に悟らずにいたので、

酔っての夢から醒めたら、何もかもわからなくなっていた。

それからというものは、憂患に身を削られ、
 心持ちはいつも霜に枯れた草のようなありさまだ。
 羨ましいのは、貴公の顔色がますます若々しくて、
 外欲に引かれることが少なく、心の内側が充実していることだ。
 貴公がいう奥義はこういうものだったろうか。

「^{かしゃ}河車^ひで水^{みづ}を挽いて^{そそ}脳の黒^{くろ}きに灌^{そそ}げ、

^{たんさ}丹砂^かを火^ひに伏^ふして^か頬^ほの紅^かに入れよ」

都で再会した貴公は、東に行くに際してこのようにぼやく。

「いつになったら籠の鳥の身から解放されるのやら

せめて仙薬の原料となる^{たんさ}丹砂の産地に赴任できればよいのに、

銅の産地で銭を鑄る仕事を仰せつかってしまったよ」

というようなわけで、離別の情を籠めてこの詩を送るのだけれど、

草書は書く暇がないので許してもらいたい。

(王頤の説く奥義はこのままでは意味不明だが、説明があったところで理解できるものではないのだろう)

■議学校貢挙状

5月、蘇軾は改革批判を本格的に始めた。王安石が意図する改革は多岐にわたり、その一つに官僚を採用する仕組みの大幅な変革もあった。その提案があまりにも大胆だったので、皇帝は関係方面に意見を求めた。

それに応じたのがこの意見書である。

(王安石は、将来的な目標として、教育機関を充実させ、学校の卒業資格をもって科挙(当時の用語では貢挙こうきょの方が一般的)に替えようとした。科挙には幾つかの科があり(蘇軾が受けたのは進士科しんしで最も難しく、合格者には高級官僚に昇るルートが開ける)、それぞれで試験の内容が異なるのだが、詩賦を課したり、経典を丸暗記しているかどうかを確かめたり、いずれにしても官僚としての能力を測るものにはなっていなかった。そのような試験で採否を決めるより、学校で実務能力をきちんと養った者を官僚として採用した方が国のためになるというのが王安石の考えで、極めて合理的である。しかも、学校制度の充実は、そもそも学校は古いにしえの偉大な為政者(先王せんおう、あるいは三代の王)に由来するもので、儒学に根深い尚古主義にも合致していた。王安石はそのような大方針に基づいて官僚の採用方法を変えて行くことを提案したので、一見すると反論が難しいように思えるのだが、蘇軾がどのような議論を展開したのか、この意見書の見どころであろう)

学校と貢挙(科挙)の利害を検討して、おのおの意見書を出すようにとの勅書に応じて、臣は伏して以下のように申し上げます。

人を採用する手段の基本は人を知ることにあります。人を知る手段の基本は実際にできるかどうかを見ることにあります。国の君主と大臣に人を知るだけのオがあり、朝廷が実際の職務を課して試す政治をきちんと行っているのなら、末端の役人に至るまで適切な人間がそこにいないということはなく、まして学校や貢挙において

不都合が起こるはずありません。その場合には、臣が思いますに、学校や貢
挙は今のままであっても十分過ぎるであります。もしも国の君主と大臣に人を知る
だけの才がなく、朝廷が実際の職務を課して試す政治をきちんと行っていない
のなら、高い地位に就くべき人間すらいなという困った事態となり、まして学校
や貢挙においては不都合だらけとなってしまいます。その場合は、臣が思います
に、古の理想の制度をそのままもってきたところで、どうすることもできないでし
ょう。国のあり方には時代によって好いときとそうでないときがあり、制度がしかりと機
能しているときもあれば廃れてしまっているときもあります。安らかに治まっていると
きには、暴君といえども制度を廃れさせることはできませんし、制度が厭われてい
るときには、聖人といえども元に戻すことはできません。風俗が変化するのに応じ
て法制度は変わっていきます。譬えていえば、^{こうが}黄河の流路が移り変わるようなもの
です。河が行こうとするのに順じてこれを治めるのなら、治水の功は得やすく、逆
に河が行こうとするのを無理やり元に戻そうとしたのでは、治水の功は得られませ
ん。三代の聖人が今の世にまた生き返ったとしても、人を選び才能を養うやり方は
いまの時代に適合したものでなければならず、必ずしも古のままではありませんで
しょう。

学校を興すことについては三十年ほど前の慶暦年間にも行われ、いずれそれが
充実して行くのを待つということでありました。しかし、今日に至りますと、その目論
みは空しく名だけが残っております。今も陛下は、徳を具え実務にも長けた人間
を必ず得ようと、制度を変え風俗も変えようとなさっています。学校を大いに興すと

なれば、そこに民の力を集めて、勉学の徒を養わなければなりません。そして、学校を卒業した者を役人に取り立て、裁判も軍事もこれらの者と謀ることになりましょう。学校の教えに従わない者は遠方に遠ざけ、採用することなく年を取らせることになりましょう。このようなことになれば、天下はいたずらに混乱し、民衆の苦しむところとなるのではないのでしょうか。あるいは、それほど大きくは変えずに、時間とともにそこそこ有益なことがあればよかろうと望むのなら、慶暦年間に行ったのと何が異なるのでしょうか。

わたし
臣が思いますに、いまの学校は現在の制度のままでもろしく、先王が定めた学校が細々ながらも続いているということで十分なのであります。

次に貢挙の制度はどうでしょうか。宋朝において貢挙を行ってきて百年余りになります。王朝の治乱盛衰はもとより貢挙の仕組みによって左右されてきたのではありません。陛下が御覧になって、貢挙の仕組みは宋朝の初期のころといまとどちらがより精緻でありましょうか。文章はどちらがより優れていましょうか。文武の才がある者はどちらが多いでしょうか。天下の人々はどちらがより知恵がついているのでありましょうか。この四点で比べて、制度の長短を議論して結論を得るべきでありましょう。

いま学校と貢挙を変えようとする議論はほんのわずかなところしか見ていません。ある者は言います、地方から徳行のある者を選出し、文章を課すことは止めようと。ある者は言います、専ら政策を論じさせて詩賦を作らせるのは止めようと。ある者は言います、唐の時代の故事に従い、評判のよい者を採用できるようにするため

に、受験生の名を隠して採点するやり方は止めようと。ある者は言います、經典の一部だけを示して前後を唱えさせるような試験を止めて全体の意味を論じさせるようにしようと。これらはどれも一部分だけしか見ていません。

わたし

臣は先に挙げた四点について以下のように申し上げます。

第一に貢挙の仕組みについてであります。もしいまの貢挙と異なって、徳行の優れた者を採用しようとしたならば、君主も自ら身を修めて行動を正しくし、民衆に対してどのような行為を好ましく思うかを明らかにして示すことになるでしょう。^{もうし}孟子はこのように言っています。「君主が仁を行えば民も仁を行い、君主が義を行えば民も義を行う」。すなわち君主の向かうところに天下も向かうのです。徳行をもって採用するとなれば、君主が好ましく思う行為を自分もしているとあからさまに見せようと民は競うようになり、それは天下の人々に挙って偽りの仁、偽りの義を行わせることとなるでしょう。君主が親孝行の者を採ろうとしていると知れば、勇む者は自身の股の肉を裂いても親を養うような行為をし、そこまでの意気地のない者は親の墓の脇に襤褸小屋を建てて、墓守をする姿を見せようとするでしょう。君主が節約を重んじる者を採ろうとしていると知れば、おんぼろの車に乗り、痩せた馬に引かせ、粗末な衣を着て、粗食で我慢することでしょう。とにかくお上の好みに合わせるためなら何でもするのです。徳行を採るよう制度を変える弊害はここに極まりましょう。

第二に文章についてであります。政策を論じる文章は有用であるが、詩賦は無益であるという主張があります。実際の政治との関係でいうなら、試験で政策を

論じようが詩賦を作ろうが、等しく無用であることに変わりはありません。無用である
とわかっていながら、宋朝の初めから試験で文章や詩賦が課せられてきたのは、
有用か無用かの判断ではなく、要するに人を採用するための手段として用いられ
てきたからです。人の発する言葉によって人を採るのは宋朝で始まったのではなく、
古の聖天子ぎやう しんの堯も舜もそっていました。『書経』にこのようにあります「言葉を見て
採り、実際の功績で試す」。古の堯や舜から、人を採ってその地位を上げていくに
当たって言葉によらなかったことはなく、人を試すにその功績によらなかったことは
ありませんでした。あくまでも政策を論じさせて賢愚と能力の有無を判断するのが
よいと主張する者がいるのなら、わたし臣はこのように申し上げます。近世の士大夫で
最も華美な文章を書いたのは楊億でありました。しかし、楊億は忠清かつ剛直か
つ誠実な人物でありました。華美な文章を書くからといって人間として劣るというこ
とはないのです。古の制度に通じて政策に詳しい者としてそん ふく孫復やせき かい石介がいました。
しかし、二人は現実離れの奇矯な説を唱え、実際の政事に施すようなことはでき
ませんでした。唐からいまに至るまで、詩賦に長けて名臣であった者は数え切れ
ないくらいたくさんいます。それなのに、どうあっても詩賦を試験で課すのを止めなく
てはならないのでしょうか。經典の全体の意味を論じさせればよいとの議論があり
ますが、近年、經典の参考書が整備され、試験問題となるような項目は漏れなく
模範解答が示されています。試験でそれを適宜繋ぎ合わせて答案を作れば、試
験官を簡単に騙すことができるでしょう。しかも、その文章は詩賦と異なって細かい
規則に従う必要がありませんから、学びやすく作りやすく、よって精緻にものを考え

る鍛錬をすることがありません。安直に暗記するだけで精緻にものを考えることをしてこなかった者が官僚になって、もともと自分で考えることを得意としない役人の上役となったときに、国の政事はどういうことになるでしょうか。それは詩賦を課して人を採用した場合よりもずっと弊害が大きいのではないのでしょうか。

第三に、文武の才のある者の多さです。唐の時代には、貢挙の試験委員長に強い権限があって、その人がよしとした人物が採用されました。評判の高い人物を採ることできて、世論を満足させたという美点はありませんでしたが、賄賂をもって権威者に請願するという害が横行しました。文武の才のある者が一見してたくさん採用されたようではあっても、それらの人々は権威者の恩に靡き、私的な派閥を生み、唐の半ばからは党派による争いを生むことになりました。少しもよい採用の仕方ではなかったのです。

第四に、天下の人々はどこらがより知恵がついているかです。いま貢挙の幾つかの科を合格した者がたくさんの部署で仕事をしています。文章を得意とする者は進士科を受け、書物の意味をよく理解する者は明経科を受け、そのほか朴訥で器用でない者はまた別の科を受けます。人にはそれぞれに備わった才能があり、実際に政事に携わらせれば能力のあるなしは自ずと明らかになります。進士科を受けるものは日夜に経典、史書を広く深く学び、しかし実際に政事においてはそれで得たもののほんのわずかしか使っていません。だから、そのような勉強したところで無駄で、経典のおよその大義を理解すれば十分であるとの意見が出てくるのでありますが、それは実に粗雑な考えです。特に臣が陛下に願いますのは、遠く考

える者、大きく考える者に意を留めていただきたいのです。衆才の中から、悪知恵の働く者を退け、必ず優れた者だけを選び出して、政治の根本をともに行うのならば、官僚を採用する細かい仕組みはさほど問題にはならないのです。……(中略)……

最後に臣は陛下わたしたちにお願いいたしますのは、以下のような御指示があるますように。人を試すにはその言葉が正しいかどうか、人を採用するには実学(儒学の本流)を修めているかどうか、そして、広く諸分野の知識がある者は朴訥であっても退けないように、軽薄に流行の議論を追う者は器用であっても用いないように。そのようにすれば世の風俗は厚みを増し、学問は正しい方向に進むであります。忠実の士を得て、風俗の衰えによって国が傾いた過去の轍を踏むようなことがなければ、天下にとってこれ以上の幸いはないのであります。

(蘇軾がここで述べたのは、制度に何らかの欠点があるとしても、現実には(王安石自身も含めて)優秀な人材が国に集まってきているのだから、何も急いで変更する必要はないだろうということである。なお、「現実離れの奇矯な説を唱え」とここに例示された石介は、第1章42ページで見たように、8歳の蘇軾を発奮させた詩を詠んだ人である)

(皇帝はこの意見書を読むと、皇帝自身が感じていた疑問点を明確に示すものであったことから、蘇軾を呼んで直接その考えを聞いた。そして、「これからはいかなることも遠慮することなく申せ」と、蘇軾に言った。このとき皇帝は22歳、蘇軾は34歳、王安石は49歳、富弼や韓琦などの重鎮はさらに上であったから、皇帝は若くて率直

にものを言う蘇軾に心を魅かれたのは十分にあり得ただろう。皇帝は蘇軾を自分のより近くに置こうとしたが、王安石が喜ばなかったので実現しなかった)

■諫買浙燈状

王安石を中心とする改革派は次々に新しい法を作り、改革を実行に移した。改革全般に疑問を抱く蘇軾は、根本に立ち返って議論し直すことを希望した。改革派はそうした議論はとっくにすんでいるとして聞く耳を持たず、蘇軾は首都開封府の治安維持かいほうに関する職務に異動となった（その仕事はなかなかの激務で、余計なことに鼻を突っ込んでなどいられなくなるだろうということであった）。それでも蘇軾は、12月にこの意見書を皇帝に差し出して勝負に出た。

（弟の蘇轍は新法の詳細を検討する部署の一員として具体的に法案を調べ、やはり根本に返って議論することを希望した。しかし、その部署を統括する呂惠卿ろけいけいは全く取り合わず、呂惠卿との関係はたちまち険悪化し、蘇轍は都を出ることを朝廷に願い出た。その願書の中で改革を徹底的に批判したために、王安石が激怒したと伝えられている）

（蘇軾がこの意見書で論じているのは、浙せつの地方で生産される灯籠せつとう（浙灯）を、宮中の役人が安く叩いて大量に買い占めようとしていることの可否である。1月15日の上元節じょうげんに、町の方々に灯籠を飾り、夜それを見物して歩くことが、宋の時代に入って盛んになり、特に都ではまことに華やかに行われるようになっていた。この年は、宮中でもたくさんの灯籠を飾ろうと、12月のうちから準備が進められていた。浙灯の買

い上げは首都の治安にも関係があるということから、蘇軾はこの意見書を皇帝に差し出したのである)

わたし
臣は先にお召を受けて宮中に参り、陛下から直接次のようなお言葉を頂戴しました。

「館職にある者は全て朕のために深く治乱を検討して、その得失を示し述べることにおいて、隠すところがあってはならない」

このときから、わたし臣は同僚に会うたびに陛下のこのお言葉を申さぬことはありませんでした。そうするのは、お上の盛徳を称賛するためだけではありません。朝廷にいる者はわたし臣のような者であっても、地位の上下によらずに、陛下は意見を聞いて下さるのだということを知らせて、ともに思うところを献じて、もって太平の功業を補佐するのに役立つようになってほしいと思うからです。

愚考いたしますに、実のない言葉だけで人を動かそうとするよりも、実のあるところを見せて、自分から動こうとするように仕向けるほうがよりよいでありましょう。つまり、陛下のお言葉を広く言い知らせるよりも、陛下のお言葉を受けて、まずはわたし臣が実行してみせるべきでありましょう。そこで臣はまず天下に先んじてごくごく小さなことを試みて、もって陛下の聖明の一万分の一でも補うことができるものかどうか、そして、世の賢者のためには陛下が臣下の意見を採用してくださるものかの判断のもとなるものを提供しようと思うものであります。この試みによって罪を得て、万死するとも悔いはありません。

わたし 臣が聞きますところでは、宮中の内向きの仕事をするお使いかんがん（宦官）が陛下の御沙汰として開封府の役所に言いますには、浙せつの地より産する灯籠（浙灯）を四千余りお買い上げになるとのこと。役所は実際の価格をお答えしたところ、陛下の御意向としては、価格を下げてお買いになりたいとのこと、さらに四千余りという数は必ずなければならないので、民には勝手に売り買いすることを禁じて、次の命令を待つようにとのことであります。

わたし 臣は初めてこのことを聞きましたとき、驚愕し信じることができませんでした。嘆息すること数日、心中密かに陛下のためにこのやり方を残念に思ったのであります。

わたし 臣は至って愚かであります。それでも、天下の人々が欲しがるものを全て尽くしたとしても、陛下が御心を経術の間に常に遊ばせて、堯ぎょうや舜しゆんが示した規範に則って行動する楽しみには替えられないとされていることは存知上げております。そして、天下の玩ぶものを全て尽くしたとしても、陛下が天下を憂う御心を解くには足りないということも存知上げております。灯籠などをお喜びなされはしないのであります。つまり、これは太皇太后様と皇太后様のために孝行を尽くされようとのことでありましょう。とはいえ、優れた孝行は物にあるのではなく心にあるのでありましょう。

民衆の一人一人に言い聞かせるのは難しく、民衆はこのようなことを言い出すかも知れません。陛下は御自分の耳目のお楽しみにために、民衆が必要としているものを奪い取ろうとしていると。灯籠を売るような者は零細の民で、借金をし利息も払って灯籠を蓄え、この十日間ほどの間に売り切って生活費を稼ごうとの算段を

しております。陛下は民の父母として、価格を増して高く買い上げることはあっても、価格を下げて安く買い叩くようなことがあってよろしいのでしょうか。

これははなはだ小さい事ではありますが、その本体ははなはだ大きな問題であります。陛下が価格を減じられるのは民衆とわずかな損益を争うというのではありますまい。無用な物を買上げるのにたくさんの費用を使うわけにはいかないからであります。無用な物と、もし御存知でありながら、どうしてそれをお求めになるのでありましょうか。たくさん費用を使うわけにはいかないと御存知でありましたら、どうしてお買いにならないということになさらないのでしょうか。

宮中の奥向きの故事を見ますに、上元の節の灯笼については、宮中のしかるべき部署が時に応じて買い求め、その数は少なく、厳しく無理に民間から取り上げるようなこともありませんでした。費用は多くなく、民衆を騒がせることもありませんでした。臣が願ねがいますのは、先の御命令を取り下げて、ことごとく普通になさることであります。

都の民衆は陛下の深い恩徳にすっかり慣れ切っていて、少しでもそれが脅かされるようなことになると、すくにも怨みが生じやすくなっています。慎重にしなければいけないのではありませぬでしょうか。近頃、都にはあらぬ噂が流れております。科挙はこれからは間遠にしか実施されなくなるとか、都での酒の売買はお上の管轄下に置かれるとか、役人の俸給は減額されるとか、兵士の手当てが削られるとか……。これらの事は朝廷において決めてなどいませんのに、やかましく取り沙汰されるのは、陛下が民を大切される徳がまだ下々の者の心に行き渡ら

ずについて、かえって厳しく税を取り立てようとの御意向があると民衆は思っているためであります。いまこそは、朝廷は己を抑制して、民衆が勝手なことを言わなくなるよう努めるべきときであります。そうでありながら、朝廷のある者が、嚴罰をもって民衆に対処するように勧めているのは、聖徳を損なうことこれ以上のものはないのであります。さらには、灯笼をお買い上げになる一件で、民衆がますます言い募るようにさせてしまっているのを、^{わたし}臣は実に残念に思うのであります。

一方、今に至るまでに、国の様々な余分な出費はまだ削られておらず、民衆の力は疲弊しております。灯笼のお買い上げの費用は、陛下のお手元の蓄えから出して、国庫から出すのではないとしても、いずれでありましても、もとは民衆の力に拠らないものはありません。平穩なときに不急の用に使うより、貯えて何かのときの備えとしておく方が勝るのではないのでしょうか。ですから、^{わたし}臣は願いますに、来るべき灯笼の祭りも、お庭での遊宴も、宴席においての賜り物も、皆係りの者を戒めて儉約していただきたく思います。

このごろ陛下の御意向で、皇族に対する臨時の賜り物を削減されましたか。これは実に陛下の至明至断の表れであるとともに、深く計り遠く慮って民のために近親への愛を割かれたことによるものでありましょう。そうではありましても、陛下にいま少しばかり密かに望むことがないわけではありません。自ら厳しく節減されて、身をもって天下の人々に先んじて実践していただきたく思います。君主でさえもこのようにしているのだから、まして我々とは思わせるようにしていただきたいのです。費えを省くだけでなく、民衆が怨むようなこともなくなるでしょう。

昔、唐の太宗皇帝は涼州に使者を派遣して、李大亮にその地の名立たる鷹を献
じるようほめかしました。李大亮がそれはできないと言ったところ、太宗は褒め、
「臣下がこのようであれば、朕は何も憂うことがない」と言いました。唐の玄宗皇帝
は江南の地に使者を派遣して変わった鳥を取ってこさせようとした。倪若水はこ
の事を論じて、使者を呼び返しました。また益州から贅沢な調度品を取り寄せよ
うとしたが、蘇頲はその詔に応じませんでした。また、唐の敬宗皇帝が浙西か
ら種々の贅沢品を取り寄せようとしたが、李徳裕はお上に強く反対し、よってそ
の沙汰は取り止めとなりました。

いま陛下のもとに唐の時代のこのような人が少しでもいれば、浙燈をお買い上げ
になることを必ず強く諫めたであります。また当該の部署に唐の時代のこのよ
うな人が少しでもいれば、浙燈を買う詔には必ず従わずにいたであります。陛下
の聡明睿聖は堯や舜の後を追っておられますのに、群臣は唐の太宗、唐の玄
宗のときように仕えておりません。臣はこのことを群臣に対して密かに咎めるもので
あります。

臣は開封府の役人として浙燈のお買い上げの件を直接目にしました。それでい
ながら何も言わずにいたのでは臣の罪は重大です。陛下がもしもそれを見逃して
罰しないのなら、臣は職務を全うしていない罪としてこれ以上に大きなものはあり
ません。陛下のために職務を尽くさずにはいられません。もしこの意見書が赦さ
れないとしても、臣としては本望であります。

以上謹んで申し上げ、伏してお言葉をお待ちいたします。

■上神宗皇帝

神宗皇帝は強い決意のもと、王安石を抜擢して改革を進めていたので、改革に反対することは、すなわち皇帝の意思に反することになる。それでも、蘇軾は国のため、民のためには命をかけても改革の問題点を指摘しなければならないと決意し、先の意見書を提出し、理にかなった意見であるのならば、皇帝はそれを聞いて考えを改めてくれるものなのか、蘇軾は試してみた。幸いにも神宗皇帝はそれを取り上げ、浙灯の買い上げを中止した。そこで蘇軾は本当に言いたかったことを書いて提出した。この意見書では、改革の内容よりもその進め方に重点を置いて批判している。

(かなりの長文であるので、全体の趣旨を損なわない程度に適宜省略して訳す。また、歴史上の事柄など説明を要するところも多々あるが、いちいち説明を付すと非常に煩瑣になるので、一部に若干の言葉を加えるだけにとどめる。流れを読み取っていただきたい。冒頭は蘇軾の肩書で、「でんちゆうじょう殿中丞」は職務ではなく位を示し、「ちよくし かん直史館」は皇帝のかんしよくブレーン(館職)の一員であることを示し、「かんかんこういん監官誥院」が本職で、「ごんかいほう ふ権開封府すいかん推官」は首都開封府の推官という職務に出向(それが「権」の意味)していることを示している)

でんちゆうじょう 殿中丞、ちよくし かん 直史館、かんかんこういん 監官誥院、ごんかいほう ふ 権開封府、すいかん 推官である臣蘇軾は、わたくし謹んで万死

の覚悟をもって再び皇帝陛下に文書を提出いたします。

近頃^{わたくし} 臣は我が身の愚かさ賤しさを顧みることなく、封書を提出し、宮中で灯笼をお買い上げになる件について申し上げました。お上の権威を犯し、罪は赦されないものと、^{むしろ} 蓆を敷いて畏まって座り、「刑罰を加えよ」との御命令が聞こえてくるのを耳を澄ませて待っておりました。十日を超えてもそれはなく、その筋の人に尋ねましたところ、灯笼のお買い上げはすでに中止になったとのことでありました。

^{わたくし} 臣は、陛下がぶしつけな意見の提出を赦してくださったばかりでなく、それをお聞き入れてくださったと知って、驚喜し、望みを過ぎた結果に感じ入って泣いたのであります。^{ぎょう しゅん う どう} 堯や舜や禹や湯の古代の聖君主はいずれも、過ちを改めることに躊躇せず、善に従うこと川の流れに乗るばかりであろうと懸命に勉めました。ところが、それは秦朝、漢朝以降は絶えてしまい、よくやく今ここにまた聞くことができたのであります。

灯笼の御購入はごく些細な過ちで、陛下御自身をお煩わせするまでもないようなことでありましたが、陛下は瞬時に改められました。このことは、そのお知恵が天下に抜きん出ているながら、最も愚かな者からも意見を聞かれ、その御権威は四海に及んでいながら、最もつまらない人間にも腰低く応じられるということを意味しましょう。よって^{わたくし} 臣は、陛下が民を富ませ、刑罰の必要がないように国を治め、兵を強くして諸外国を圧すること、堯、舜、湯、武に等しいと知ったのであります。

陛下がこのようでありますからは、誰が陛下に背きましようか。お仕えする者は心の内の全てを陛下にお見せして、身の一切を擲って力を尽くすことだけを考え、その

他一切を顧みはしないのです。

いま天下には灯笼のお買い上げよりも大きな事柄があります。それを差し置いて灯笼について先に申し上げましたのは、信頼を寄せるよりも前に諫められるのは聖人でも受け入れられなかったことであり、交わりが浅いうちから核心に迫ったことを言うのは君子の戒めるところであるからです。試みに小さなことを論じ、その結果を待って大きなことを申し上げようと考えたのであります。陛下は^{わたくし}臣を赦され処罰なさいませんでした。それはすなわち、^{わたくし}臣がより大きなことを申し上げるのをお許しになったことを意味すると申せましょう。許されながら言わないのでは臣下として罪になります。よってここに申し上げる次第です。

^{わたくし}臣が申し上げたいのは三つです。人心を結ぶ、風俗を厚くする、紀綱を存するであります。

第一に「人心を結ぶ」であります。

人の行動には必ず依拠するところのものがああります。臣下は陛下の御命令に依拠し、それによって人民を動かすことができます。陛下の御命令は法に依拠し、それによって横暴な者も服従させることができます。人の最も上に立つ人主は^{じんしゅ}何に依拠するのでしょうか。

^{しよきよう}『書経』にこのような言葉があります。

「私は億兆の民の上に君臨している。それは、腐った縄で六頭の馬を操って走るほどに危ういものである」

これは、天下に人主よりも危ういものはないことを言い表しています。ひとたび集ま

れば君主と民の関係になります。ひとたび離れればたちまち仇敵となります。集散は紙一重であります。天下が一人のもとに帰するときにはその人を「王」といい、人々の心がばらならなくなったときにはその人を「^{ひとりぼっち}独夫」といいます。

このことから、人主の依拠するのは人心だけであるのがわかります。人主にとっての人心は、木にとっての根のようなもの、^{ともしび}燈にとっての油のようなもの、魚にとっての水のようなもの、農夫にとっての田のようなもの、商人にとっての資本のようなものです。木に根がなければ枯れ、燈に油がなければ消え、魚に水がなければ死に、農夫に田がなければ餓え、商人に資本がなければ貧窮となります。人主は人心を失えば亡ぶのです。これは必然の理であって、逃れることのできない災いです。

この必然の理は大昔からあり、ずっと畏れられてきました。禍を楽しみ、亡ぶのを好み、性根を簡単に失ってしまうような者でなければ、誰が敢えて我欲をほしいままにして、軽々しく人心を冒そうとするでしょうか。

古代の大臣の子産は「^{しゅん}衆人は怒らせると手が付けられず、人主一人の欲を押し通すことなどできない」と言って、慎重に政治を行いました。孔子も「^{こうし}民衆を動かすには、先に民衆の信頼を得なければならない。信頼がないのに動かそうとすれば、民衆の恨みを買うことになる」と言いました。

ところが、^{しん}秦国の大臣であった^{しょうおう}商鞅は、人々の批判を耳に入れず、法を変え、俄かに国を富まし国を強しました。しかし、商鞅は天下の恨みを招き、民衆は利益だけを知って正義を知らないようになり、刑罰を恐れて道徳を忘れました。その

ため秦国は天下統一を成し遂げられたものの、一瞬にして滅んでしまいました。商鞅自身も罪を問われて逃亡し、誰にも受け入れてもらえず、ついには車裂きにされ、一人も憐れむ者はいなかったのです。

君臣が秦のようであることを願う者がどこにいますか。

宋の襄公^{じょうこう}は仁義に基づく行動を貫こうとしましたが、衆人の心を失って亡びました。逆に田常^{でんじょう}は不義を行いながらも、衆人の心を得ていたのでその国は強力でした。

このことから、君子は行くことの道徳的な是非を論じるより前に、まず衆人の心がまとまっているか、ばらばらであるのかを見ます。

謝安^{しゃあん}が軍閥の長を用いたのは義として正しいとはいえませんでした。衆人がそれを望んだからそうたまで、国はそれによって安泰でありました。庾亮^{いりやう}が蘇峻^{そしゅん}を懲らしめるために都に召し寄せたのは正義の行使として悪いことではありませんでしたが、当時の情勢としてはまずいことであつたために国の危機を招いてしまいました。

このように見てくると、古来、衆人と和やかに一致して安泰でなかった者はなく、強引に己の思うところを通して危うくなかった者はいないのです。

いま陛下^{よみこ}も人心が悦ばずにいることは御存じでありましょう。宮廷の中の人も外の人、賢人も不肖の者も、皆が困惑しています。宋の開国以来、財政政策は三司使副判官の職責とされ、百年を経過して問題はありませんでした。ところがいま制置三司条例司という部署を新たに作り、六、七人の若い官僚を集めて日夜政

策を研究させ、四十余人の官僚を国内各地に派遣して、その政策を実行させようとしています。その政策は広大な範囲に及ぶために、民衆はどうなることかとびくびくしています。新奇な法が作られ、役人は皆動揺しています。賢者は政策の狙いを掴もうとして理解できないために憂慮し、小人は朝廷の向かおうとしているところを推し測って、賢者を誘って陥れようとしています。

都から遠く地方に至るまで、様々なことが言われています。例えば、陛下は万民の主でありながら、利についてはばかり目を向けていると。例えば、執政は天子の第一の臣でありながら財産管理にばかり目を向けていると。例えば、商人の仕事は破壊されて物価が騰貴すると。例えば、都の店舗には政府の管理人が置かれ、深山の村にも酒の製造を禁止する命令が下され、宗教寺院の収入は取り上げられ、兵士や官吏の給料は削減されると。数え切れないほどたくさんことが言われています。特に甚だしいのは、残酷な肉体刑を復活させようとしていると言う者までいます。このようなことが言われ出して、民衆は不安に駆られ、狼狽しています。

陛下も二三の大臣からこのようなことをお聞きであります。しかし、陛下にそれを顧みられる御様子がないのは、

「朝廷には言われるような事実はないし、そのようなことをする意志もない。根拠のない民衆の言論、『人言』をいちいち憂うことはしないでよろしい」

という御判断からなのでしょう。

人言はどれもが正しいわけではありません。しかし、疑わしいことがあるから批判も

生じるのです。富をやたらと貪る人がいると、盗みをするのではないかと疑い、女性をやたらと好む人がいると、淫乱なことをするのではないかと疑うものです。

朝廷の何が疑わしいのかといえば、制置三司条例司を設置したことです。去年までの朝廷の人々は忠厚であったのに、今年の朝廷の人々は軽佻浮薄であるために、にわかに人言が騒がしくなったということではないのです。

孔子はこう言いました。

「職人が仕事をしようとするときにはまずそのための道具を整える」「あるいは、役目に、それにふさわしい名称を与える」

いま陛下は道具を整え、名称を付けておられながら、問題になるような事実はない、それを行う意志もないと、弁の立つ者に言い訳をさせても、あるいは千金をばらまいて人々を納得させようとなさっても、人々はきっと信じませんし、批判もやまないでしょう。なぜなら、制置三司条例司を設置したのは、利を求めることに名を付けたに他なりませんし、六、七人の若者、四十余人の使者は利を求めるための道具に他ならないからです。

鷹や犬をけしかけて林に入れていながら、「私は獵をするのではない」と言って、林の獣たちは信じるでしょうか。鷹や犬を余所にやりさえすれば、林の獣はなついてくるでしょう。網を川や湖に投げ入れていながら、「私は漁をするのではない」と言って誰が信じるでしょうか。網をうっちゃってしまえばよいのです。

ですから、^{わたくし}臣は、批判の声を消して和合させ、人心を元に戻して国の根本を安んずるには、制置三司条例司をなくすのが最もよろしいと考えるのであります。

陛下が制置三司条例司を設置されたのは、国家の利を増やし、国家の害を除くためでありました。これをなくしたら利が増えず、害が除かれないのなら、なくさなくてもよろしいでしょう。しかし、なくせば天下の人々が喜び、人心が安まり、利を増やし、害を除くことも行いやすくなるのです。それでいながらどうしてなくさずにいてよいのでありましょうか。

陛下は積り積もった弊害を除き去るために新たな法を立てようとなさっています。法を立てるには、必ず宰相が熟議してから発案し、そして中書省において法案を審議することになっています。その過程を踏まない法は、安定した治世下では存在するものではなく、乱世の法と言わざるを得ません。聖君、賢相は決してそのようなことはしないのです。宰相が熟議し、中書省で立法するという正しい手順を踏むのなら、制置三司条例司は余分な存在であり、実質的に存在する名目がありません。

真に智恵のある者は、際立った特異なことはしないといえます。漢の文帝、景帝ぶんてい けいの時代の記録には特筆されるような事績は何もなく、唐朝の宰相であった房玄齡ぼうげんれい、杜如晦とじょかいの伝記には特筆されるような功績は何も記載されていません。しかし、天下が最もよく治まったのは漢の文帝、景帝の時代だとされ、最高の賢相は房玄齡、杜如晦だとされています。優れた事績は自然に完遂されて目に付くことがなく、優れた功績は自然と成就して人に知れないものであるからなのでしょう。

上手に軍事力を行使する者には、際立った戦功がないともいえます。その言葉は用兵に限らず、あらゆることに通じます。

現在、意図されていることはまだ万分の一も実行されていません。それでも天下に際立った痕跡がすでにできあがってしまっています。それはあたかも泥の中で猛獣が戦ったかのように顕著はかりごとであります。拙劣な「謀」と言うべきではないでしょうか。

陛下が本当に国を富ませよとなさるのなら、正規の職務にある者を選んで、数人の大臣とともに熱心に議論させ、十分な歳月を使って実行して行くべきではないでしょうか。そうすれば、積もり積もった弊害も、天下の人々が気付かないうちに自然と消え去って行くであります。その際に恐れるべきは、志を立てることが堅固でなく、道の半ばで終わってしまうことです。

もうし孟子はこう言いました。「その進み方が速過ぎる者は、後退するの速過ぎる」。始めから終わりまで完遂するときはじわじわ進むのであって、ゆっくりであっても十年の歳月をかければ成就しないことはないのです。

孔子もこのように言っています。「いきなり速く行こうとすると到達できない。小さな利に目移りすると大きなことは成就しない」。

孔子は聖人の仲間には入らないとするのなら、この言葉は用いるに値しないでしょう。

『書経』にはこう書かれています。

「広く官僚と謀り、庶民も一緒になって、皆が喜んで行動を共にするのなら大吉といえる。もしも逆らう者が多く、一緒に従う者が少ないときは、静かにしているのが吉で、それでも為そうとするのは凶である」。

いま宰相、大臣も続々と辞任し、事を為そうとするところから離れています。朝廷の外での議論の向かうところは明らかであります。宰相は事を為すなかに加わることで己の身が汚れるのを望んでいません。そうであるのに、陛下はどうして安んじておられるのでしょうか。愚かな^{わたくし}臣には理解が及びません。……(中略)……

臣^{わたくし}が恐れますのは、いまここに昔の悪しき例(この訳では省略した)を引いて論じているように、後世の論者が今を悪しき例に加えて論じるようになることです。

さらにいえば、今が昔の事例よりも具合のよろしくないことさえあります。中央から地方に派遣して改革を遂行させようとしている官僚集団には、十分な実績のある者は一人もいません。事は非常に煩雑であるのに人員が少なく、能力がないにもかかわらず権限だけは重くなっています。能力がないのに権限だけが重い人がいると、人々は心の内で馬鹿にし、表面上だけ服従します。それは争いのもととなるでしょう。事が煩雑で人手が不足すれば、実効性が危ぶまれ、出来なくても出来たかのような虚偽の報告が為されるであります。陛下が厳格に命じられて、虚偽の功績は断じて許さないとおっしゃっても、臣下の者は陛下^{こころ}の情を忖度して、命令を守るよりもむしろ陛下の意向に副おうとするでしょう。朝廷の意向はいまどこにあるのでしょうか。改革の実行を好み、何もしないのを憎みます。一致して動くことを好み、異論を唱えてじっとしているのを憎みます。そうであるとはっきりとわかっていて敢えて従わないのは難しいのです。

臣^{わたくし}が恐れますのは、陛下^{せきし}の赤子が今後、穏やかな歳月を送れなくなることで、これから行うとしていることは、実行が非常に困難であるのは誰もがすでに論

じている通りです。……(中略)……

孟子は言いました。「死者とともに埋める土偶を初めて作った者の子孫は、必ず絶えるであろう」。

土偶を作って死者と一緒に埋葬することを始めれば、いずれ土偶に留まらなくなり、君主は土偶よりも臣下自身が死後の伴ともをするのを望むようになり、臣下もまた忠誠を示すために殉死を望むようになります。

いま陛下は新たな法を不正がないよう運用せよと厳しく命じておられます。しかし、数世の後の暴君、あるいは汚れを厭わない役人が、いま作られた法をもとにあくどいことを企てるのを陛下はどのようにしてお止めになるのでしょうか。土偶から殉死が発展して数多の悲劇が生まれたように、後世の人々は非常な苦しみに遭うであります。そのときに、元凶は宋の時代の改革にあったと論じられたなら、実に残念ではありませんか。……(中略)……

わたくし 臣が推量しますに、このような弊害が本当にあるのか検討しようと陛下が思われたならば、果たして実態はどうかと法の立案者にお尋ねになるであります。尋ねられた者は、陛下が改革を断行なさろうとしているのを知っていますから、必ずこのように言うでしょう。「この法には利はありますが害はありません」。そして実際に新法を施行して後に、その成果があったと報告するであります。

わたくし 臣の愚見を申し上げれば、このようなことは信頼に値しないのです。わたくし 臣は先頃西方の地におりました。そこでは、国境方面での事態に対処するために兵士の徴集が実施されていて、民衆が嘆き恨み泣く声わたくしを臣はたくさん聞きました。ところが、

朝廷から派遣された役人は、民衆は皆喜んで朝廷の命令に従っているとの報告だけをしていました。朝廷の意向に合うようなことのみを見たいと願う役人にはそのことしか見えず、朝廷がどのような報告を歓迎するかを知っている役人はそのような報告をすることしかしません。昔も今もそのようなことはたくさんあります。そうした虚偽によって国を減ぼすには至っていないいまうちに、陛下が正しく詳細に吟味されることを^{わたくし}臣は望むばかりです。……(中略)……

陛下は天機も明瞭にお分かりになり、聖なる智略は神に及ぶほどでありますから、^{わたくし}臣が申し上げるようなことはたちどころに御理解いただけるでありましょうが、それでもこのようにおっしゃるかも知れません。

「すでに改革を始めたのだ。途中で変えるのはよろしくない。天下の人々は朝廷の方針が一貫しない、人を用いても最後まで成し遂げさせないと批判するであろう」

始めたからにはそのまま歳月をやり過ごし、万一の成功を願うということもあり得ましょう。しかし、^{わたくし}臣は心密かに思つたのであります。それは間違いであると。

^{いにしへ}古の英主として漢の高祖に勝る者はいません。^{れきい き}酈食其なる者が^{はかりごと}ある謀を高祖に進言し、高祖は即座に「よし」と言って、酈食其にそれを実行するよう命じました。

しかし、その直後に^{ちようりよう}張良の意見を聞くと、口中の食べ物を吐き出し、「やめさせろ」と、酈食其を激しく罵りました。高祖が「よし」と言ってから「やめさせろ」と言うまでわずかの間しかなく、まるで子供の気まぐれのようでありました。このことから高祖がなっていないと考える人はおらず、真に英邁な君主は^が我を押し通すことをしない

と知るので。

陛下が一度は「よし」とお考えになってそれを行い、しかし「よくない」とお分かりになった時点でお止めになれば、人々は陛下こそは至聖至明の英主であると考え
てでありましょう。

いま改革を議論している人々は必ずこう言うでしょう。

「陛下は将来、民とともに改革の成就を楽しむことができます。民は陛下のように
初めから先を予測することはできないので、あれやこれやと言い募ります。陛下
はそれに惑わされてはなりません。心に期して必ず実行あるのみです」

これは乱世において危険な一発勝負にかけて万に一つの成功を願う者の言説
であります。陛下がもしもこれを信じて用いられるならば、声高な議論に従って人
間の最良の知恵に逆らい、空虚な計画に頼って実際の禍を迎えるようになり、成
就を楽しむどころでなくなってしまうでしょうし、実はすでに民衆の怨みは湧き立っ
てきているのであります。臣が人心を結ぶことを願うと申し上げているのは以上のよ
うなことであります。

第二に「風俗を厚くする」(社会のモラルを高める)であります。

そもそも国家の存亡の根本原因は道德の浅深にあって、国家の強弱にあるので
はありません。国家が存続した年月の長短は、風俗の厚薄によるのであって、国
家の貧富によるものではありません。道德が誠に深く、風俗が誠に厚ければ、貧に
して弱くとも長く存続し、道德が誠に浅く、風俗が誠に薄ければ、強かつ富むとも
短くして亡んでしまうのです。国家の君主はこのことから何を重んじるかを知らなけ

ればなりません。

古の賢君は、弱いからといって道徳を忘れることなく、貧しいからといって風俗を傷つけるようなことはしませんでした。智者が他国を観察するときには、何よりもこの点から評価をしたものです。……(中略)……

以上のことから、陛下が道徳を尊んで風俗を厚くわたくしなされることを 臣は願ひ、陛下が富みかつ強くなることいざおの功を急がれることを願わないのであります。陛下がかつての秦朝や隋朝のように領土を拡大されたならば功があったと言うべきなのでしょう。しかし、国家の長短はそこにはないのです。

そもそも国家の長短は人の寿命のようなものです。人の寿命のものは「元氣」げんき(物質とエネルギーのおもと)にあります。それと同じように国家の長短のものは「風俗」にあります。世間には病気がちでも長生きの人もいれば、血氣盛んでも若くして突然死んでしまう人もいます。「元氣」が存在すれば病気があっても生きるに害はなく、「元氣」が消耗してしまえば若くても生きるのは危うくなります。

よく養生する者は、日常動作を慎み、飲食をほどほどにし、関節や筋肉をよく揉みほぐし、使い古した「氣」を吐いて新しい「氣」を身の内に納め、やむを得ず薬を用いるときには品質のよい物、性能のよい物、長く服用しても害のない物を選びます。それによって五臓が和平であるから寿命が長いのです。養生がよろしからぬ者は、慎んだりほどほどにしたり、氣を吐いたり納めたりに無頓着で、上質の薬でなく質の悪い薬を用いて、無理やり「氣」を強めようとして、かえって根本を危うくして、たちまち倒れてしまうのです。天下の勢いもこれと異なることはありません。臣は陛下

が風俗を愛惜されてそれを護ること、養生に熱心な人が「元気」を護るようになってほしいと願うものであります。

古の聖人は、厳格な法が社会をひとまとめにし、勇敢な者が事を成し遂げる可能性があると知らなかったわけではありません。一見すると、真心などというのは役立ちそうになく、老成の者はただののろまのように見えます。しかし、聖人は法をもって真心に、勇敢をもって老成に代えようとはしませんでした。そうしても得るところが小さく、失うところが大きいからです。……(中略)……

盧杞^{ろき}が唐朝の大臣になると、法制を整えて天下を引き締めることを皇帝に採用させました。それからは世の人の心が次第に軽薄に流れ、ついには都から皇帝が逃げ出さなければならない事態に至ったのでした。

我が宋朝の仁宗皇帝^{じんそう}が天下を治めたときには、法の運用はいたって寛大で、人を用いることでは順序がありました。過失がないよう努め、旧来の仕組みを軽々しく変えることはありませんでした。その時代の功^{いさお}を検討すれば、さしたるものはなかったといえましょう。兵を用いることでは、十回外に出て九回敗れました。国庫をみれば、かるじて収支が足りて、余剰はありませんでした。それでも、皇帝の徳は人々に及び、風俗は義を知り、皇帝が逝去された日には、天下の人々は自分の父母を失ったように悲しんだのでした。国家が長く保たれるとは何によるのか、仁宗皇帝はよく御存じてあったのです。

現在の改革を議論している者は、こうしたことの根本を理解しないで、仁宗皇帝の治世の終わりには、官僚がいたずらに慣例に従うだけで、業績が上がらなかった

と批判し、そのことをもって、官僚を厳しく管理して引き締めなければならない、能力主義で評価すべきだと、新進の勇ましく鋭い者を中央に招集して、速やかに実効性の挙がるようなことをさせようとしています。そのため、改革の実利が出るよりも先に盧杞の時代のような軽薄な風潮が早くも生まれ出てきています。

歴史は同じことを繰り返すわけではなく、過ちをしない人はいません。国家の君主は包容力に富むのがよく、明察過ぎてはいけません。もしも陛下が多くの人々を包み込まれるのなら、優れた人材は順次用いられるようになるでしょう。監察を厳しくして、過ちを一切認めないようにするのなら、人々は不安になって、ただ見逃されることばかりを求めるようになります。それは恐らく朝廷にとってよいことではありません。陛下が願われることでもありませんでしょう。いまもし、弁が立ちすばしっこいだけの者を用いて、応対が遅いだけの者を退け、大きなことを言って、言葉を飾ることに巧みで、いかにも徳があるように見せかけているだけの者を用いるのなら、古の聖人が大切にしたものは一切消え去ってしまうであります。

古より、人を用いるときには必ず何度も試しました。際立って抜きん出た器量があっても、成し遂げた功績がなければ、高い地位に用いることはありませんでした。そうであるのは、一つには、いろいろな経験をさせて政治の難しさを知らせるためで、それによって軽々しい行動をしなくなります。また一つには、その功績が立派なものであれば、周囲から重んじられ、とやかく言われることはありません。

昔、蜀の劉備は黄忠を拔擢して將軍の地位を授けようしました。しかし、諸葛孔明は、黄忠の名望はまだまだとても関羽や張飛に及ばないので、もし同じ地位に

就けたならば必ずや悦ばれないだろうと、賛成しませんでした。果たして、黄忠を將軍にすると関羽が不平を口にしたのでした。黄忠はまことに豪勇の士であり、劉備のもとに君臣は一つにまとまっていたのですが、それでもなお人の用い方にはよくよく考慮しなければならなかったのです。……(中略)……

高い地位、多くの報酬は人が強く望むものです。必ずたくさんの苦労を重ねてからでないとは得られず、得られたなら長くそれを保てることが明らかに示されているのならば、人々はそれぞれ自分の今の状況に安んじて、俄かに獲得しようと思ったりはしません。いまし簡単にすぐに進める門が開かれ、思いの外たったひとまたぎで高い地位に就けるようになり、それを得た者が望外の幸いであると思わずに、当然のことだと胸をぞらせて自慢したならば、その門に入れなかった者は見捨てられたとの恨みを抱くであります。天下には官職に就くのを待ち望む者が大勢います。その者たちを、不用意にも、諸君等は役立たずだと恥じめたならば、何が起こるのか予想がつきません。風俗を厚くすることなど全くできなくなってしまうのです。

科挙に合格して官員になってから朝廷で用いられるまでには、常に十年以上がかかるとされていました。難しい仕事を与えられ、その成績を厳しく吟味され、一つでもよろしくない失敗があれば、生涯にわたって高い地位に上れなくなることさえあります。ところが、たった一人の者が推薦しただけで、たちまち朝廷で用いられ、それでも足りないとはばかりにさらに高いに地位に就けるようなことがいま行われています。それに対して、長年苦勞してようやく朝廷で用いられるに至った者はどのよう

に感じるでありましょうか。そもそも官職に就くのを待ち望む人の多さに比べて欠員が少ないために、長年にわたって人々の憂うところとなっています。それなのに、別の門を開いて、巧みに進む者を入れてよいのでしょうか。巧みな者が甚だしく優遇されるのなら、拙い者はやるせなさに追いやられ、両者の利害対立が形として現れ出ると察しないわけにはいきません。従って、不器用でも純僕な者が減って、巧みですばしこい者がますます多くなるに違いないのです。

陛下はただ簡素であることを規範とされ、清浄な御心で衆人を御覧になり、奸臣かんしんの付け入る隙を与えず、民衆の道德心を高めるようになさればよろしいのです。

臣わたくしの願う風俗を厚くするとはこのようなことであります。

第三に「紀綱を存する」であります。

古から、国を建てるときには、中央と地方の力の均衡に注意を払いました。周王朝は中央が軽く地方が重い例で、秦王朝は中央が重く地方が軽い例でした。中央が重いと悪い大臣が皇帝を意のままに操ろうとする弊害が生じ、地方が重いと有力な諸侯が中央に取って代わろうとする弊害が生じます。聖人は国勢が盛んな間にも衰えることを予測し、規範を立てて弊害が生じないようにしました。我が宋朝は、国家の租税が中央に集められ、兵力の多くが都に置かれています。中央が重い例であるといえるでしょう。

恭しく拝察しますに、我が宋朝の祖宗そ そう(初期の皇帝)が予め深く計るところのものは何であったのでしょうか。臣わたくしごとき者がよく理解するところではありませんが、台諫たいかん(皇帝および官僚の不法な行為を監視する機関)という部署に与えた役目を見れば、祖

宗が国家の衰亡を防ごうとした絶妙の計画の一端を窺い知ることができます。

秦朝、漢朝から五代十国の時代に至るまで、皇帝を諫めて死罪に遭った者は数百人に及びましょう。しかし、宋の建国から、皇帝を諫めて罪を問われた者は一人もいません。少しばかりのお咎めを与えられることがあっても、その人も後には昇進を果たしました。官の上下によらず弁明も許されています。

台諫の構成員は尊卑を問われることなく採用され、その言うところが皇帝に関わる場合は、皇帝は姿勢を改めて耳に納め、朝廷に関わる場合には、宰相も罪を覚悟しました。仁宗皇帝の世には、「宰相は台諫の言いなり」と皮肉にも言われもしました。聖人の深い意図は、そのようなことを言う俗な者の知るところではありません。台諫の任に就いた者は全てが賢人であったわけではなく、その言辞の全てが正しかったわけでもありません。それでもその鋭気を養わせ、重い権限を与え続けたのは、無意味なことではありませんでした。悪だくみをする大臣が出てくるのを未然に防ぎ、中央が重すぎることによる弊害から救ってきたのです。奸臣が出そうになったら、台諫が言論で挫けばよいだけです。奸臣が力を持ってしまっからでは、武力をもってしても除くのが難しくなってしまいます。いま法令は厳密で、朝廷は清明で、いわゆる奸臣は万に一つも出てくることはあり得ません。しかし、猫を養うのは鼠を除くため、いまは鼠がないからといって、鼠を捕える能力のない猫を養うべきではありません。犬を飼うのは泥棒を防ぐためです。いまは泥棒がないからといって吠えない犬を飼うべきではありません。陛下におかれましては、上は祖宗がこの官を設けた意味を考えられ、下は子孫の万世の防ぎのために何

が必要であるかを考えられて、朝廷の紀綱で台諫よりも大きなものはないと御理解いただきたいのです。

わたれ
臣が幼小の頃に長老の談じるところ聞き、皆がこのように言っていました。

「台諫の言は、常に天下の公議に従うものだ。公議の与^{くみ}するところに台諫もまた与する。公議が撃つところは台諫もまた撃つ」

えいそう
英宗の治世の初めに、英宗の真の親をどのように祀るべきかという議論が湧き起りました。皇帝が過ちをしたわけでもないのに議論が過熱し、儀礼の決まりがそもそも明確ではなかったことから、人々は不安を感じ、公議は一つにまとまりませんでした。当時の台諫は死を覚悟してその議論に関与しました。

今はそのときどころではないほどに議論が沸騰し、怨みや誹りさえ次々に起こっています。しかし、公議の所在は自ずと知れるところであります。ところが、台諫は顔を見合わせて何も言おうとしないので、朝廷の内外の人々は失望しました。台諫が公議に反するところを弾劾してその権威を示したならば、凡人もまた奮い立つてありましょう。しかし、台諫が黙りにくってその権威をないものにしたならば、いかに豪傑といえどももう立つことができません。わたれ臣が恐れるのは、これ以降、こうしたことが習慣となって、官僚はただただ執政の手下となって、皇帝がお一人だけ孤立することです。紀綱がひとたび廢れてしまえば、もはや何が起こるのかわかりません。

孔子はこう言いました。

「愚かな人間と一緒に君主に仕えることはできない。愚かな者は、地位をまだ得

ていないうちは、これを得ていないことを患い、これを得てからは、これを失うことを患う。失うことだけを患うのなら、どのようなことでもしてしまう」

わたし
臣はこの言葉を初めて読んだとき、極端なことを言うものと疑問に感じました。愚かな者でも、せいぜい位に就いてそれ相応の待遇をされないのを患うに過ぎないと思ったのです。しかし、秦の時代に、宰相りしの李斯が將軍もうてんの蒙恬にその権限を奪われるのではないかと患い思ったことから、ついには秦を滅ぼすようなことをしてしまい、唐の時代に、宰相ろき かいこうの盧杞が懷光よって罪を告発されるのではないかと患い思ったことから皇帝を誤らせて国家の大乱を招き寄せたといった事例を知るに至って、ただ自分の地位が失われるのを心配しただけのことから、ついには国を滅ぼすようなことにもなるということがわかり、孔子の言葉が少しも言い過ぎではないと納得したのでした。

ふだんから己の身を忘れて地位の上の者の顔を犯しても意見を言うような者こそが、国家の難儀に及んだときに、義に殉じて命を捧げる者であると、国を治める者は知るべきです。ふだんから一言も意見を言わない者が、国家の難儀に及んで何かをすると期待できでしょうか。人臣が全て何も言わないようになったら、天下はほとんど危ういというべきです。

『論語』に「君子は和して同せず、小人は同じて和せず」とあります。「和」とは羹スープの中で五味合わさるようなことをいい、「同」とは水の勢いに巻き込まれて何もかもいっしょくに流されてしまうようなことをいいます。

そんぼう
漢の時代の孫宝はこう言いました。

「周公は古代の偉大な聖人で、同じ時に召公は偉大な賢人であった。互いに悦ばないところがあり、それぞれに規範となるべきことを示し、しかし、互いに攻撃し合うようなことはなかった」

晋の時代の王導は当時の大元老でありました。王導が客人と話すと、一同の者は必ず「まことに結構でございます」と称賛しました。王述だけはそうしたことを悦ばず、「古代の聖人の堯や舜でなければ、何をしても常に結構ということはあり得ない」と言ったので、王導は襟を正して王述に謝りました。

もしも言うことにおいて同じでないことがなく、思うところにおいて合致しないことがなく、一方が唱えれば他方が賛同するのであれば、見かけ上、賢人同士ということにもなりましょう。そこに下らない人間が入り込み、褒め合いの中に加わったならば、上に立つ君主は、賢人と下らない者との見分けがつかないであります。

臣が願くば紀綱を存するようにと申し上げるのはこのようなことからであります。

臣は、新しい政治に単に難癖を付けて異論を唱えようというのではありません。近頃実施された幾つかの施策は、陛下の神算の至明より出て、乾剛の必断によるもので、議論も尽くされていますので、臣も敢えて物を申すようなことはいたしませんでした。そして、ここに献じました三つの論議は、臣だけの私見ではなく、朝廷の内外の人々も憂慮しているところのものであります。

古の聖人であった舜も、偉大な君主であった成王も、漢の高祖も、晋の武帝も、手厳しい批判の言辞を受けたことがありました。必ずしも当たらないところがあっても、採るべきところを採って、批判した人を罪に問うことはありませんでした。それは

美談として史書に記録されています。

わたし

臣が献じた三つの議論が、いまの朝廷においては全く当たるところがないということであれば、天下にとってはまことに幸いであり、その幸いを天下に示すことに臣が寄与したということになりましょう。もしも万に一つでも当たるに似たところがありましたなら、陛下はきっとお気付きになるであります。

わたし

臣がこのようにいたしますのは愚かというよりありません。虫けらのごとき身をもって、雷神の威光に対峙するようなこと、狂ったような愚かさを積み重ね、それは断じて赦されるものではありません。罪が大きいとされれば、胴と首が場所を異にし、一家は破滅となりましょう。罪が小さいとされましても、官員から放逐され遠くに流されて路頭に迷う身となりましょう。しかし、陛下はきっとそのようにはなさないであります。なぜなら、わたし臣が生まれながらに愚かの至りで、自分の考えだけに凝固まっている者であることを、陛下はよくよく御存知であるからです。先にわたし臣は貢挙と学校の制度を改めようとする大臣の考えに反することを申し上げました。その時すでに遠く流罪となることを覚悟し、自分の身が保たれるとは思っていませんでした。ところが、陛下はわたし臣の議論にも然るべきところがあるとされ、曲げて御前へのお召しを賜わり、穏やかにお話された後で、わたし臣にこのようにおっしゃいました。

「近頃の政令の可否はいかがであろうか。朕の過失であっても指摘してよろしい」

わたし

臣は即座にお答えいたしました。

「陛下は天からお知恵を授かり、文武にわたってその縦横の才能をお具えてございます。明察においてお困りになることはなく、励勤においてお困りになることはなく、

英断においてお困りになることはありません。お困りになることがもしあるとしたら、政治の達成の速さをお求めになり過ぎるところ、有為の人を用いようとするのが鋭過ぎること、言論を広く聞こうとされ過ぎるところでありましょうか」

このように申し上げましたところ、陛下はそれぞれに当てはまることにはどのようなことがあるのかとお尋ねになりました。臣^{わたし}がお答えすると陛下は逐一頷かれ、このようにおっしゃいました。

「そなたが指摘してくれた三つの困る点を朕はこれより熟思するでしょう」

臣^{わたし}の狂ったような愚かさは今回のこの意見書だけではないのです。陛下はかつて臣^{わたし}の狂愚を許容してくださいました。始めに許容して下さって、終わりに許容してくださいらないことはない、それを恃みに、懼れずにこの意見書をお出する次第でございます。

臣^{わたし}の懼れるところは別にあります。臣^{わたし}への批判はすでに多く、臣^{わたし}を仇と怨む者もすでにたくさんいます。必ず臣^{わたし}を謗り、厳しい法を適用せよ、嚴罰を与えよと言い、陛下が臣^{わたし}を赦そうとしてもできないようにしてしまうのを臣^{わたし}は懼れます。

いかに危うくとも、臣^{わたし}は死を辞するものではありません。最も恐れるのは、臣^{わたし}が重罪になったのを天下の人々が見て戒めとして、ものを言う者がもういなくなってしまうことです。

このようなことを考え、この月日は、日夜この文章に取り組み、書き上げては棄てるということ何度も繰り返しました。陛下が先に灯笼の件で臣^{わたし}の一言を聴いて下さったことに感じ入り、考えて考えて断念すべきではないと、ついにこの議論を申し上げ

げるに至りました。

陛下にお願いいたします。臣のこの愚忠^{わたしの}を憐れみ、これを提出いたしましたことをどうかお赦し下さい。平伏して罪を待ち、憂恐^{ゆうきょう}の至りに勝えません。

(ここに蘇軾が指摘したことは、その後の改革の進行に伴って、ほぼこの通りの問題となって顕在化した。その一つの大きな要因は、王安石は大改革を構想する緻密な頭脳を持ち主であったけれども、人間社会が原則通りには動かないというごく普通の感覚に欠けるところがあったという点に求めることができるであろう)

■次韻楊褒早春

熙寧^{きねい}3 (1070) 年、蘇軾 35 歳。

蘇軾が皇帝に差し出した先の意見書は聞き入れられるところとならず、改革は急ピッチで進められ、反対する人々は次々に都を去り、年が改まるとすぐに弟も都を離れた。そのような時期に楊褒^{ようほう}が詠んだ早春の詩に和したもの。

街中から奥に引っ込んだ我が家にて、
 なお続く寒さを、私は悩ましげに過ごしていた。
 痩せた馬にまたがり、雪の残る道に出てみたところ、
 どこかからか春の楽曲を歌う女性の声が聞こえてきた。
 いつの間にもやら足を伸ばし、貴君の家にまできた。

貴君の庭には春の訪れを知らせてくれるものがいろいろにあり、

ここで心のうさを晴らしたらどうかと、

貴君は酒を用意してくれた。

天の運行を司る神が、

おせっかいにも我々の年齢をまた増してくれたと、

恨みがましく言おうとは思わないが、

良い時節と楽しい事とが同時に二つ並ぶのは、

なかなかないと、大昔から決まっているようだ。

しがない役人暮らしの歳月をこれからも重ねるうちに、

過ぎた年数の証はただ髪が白くなっただけということになって、

いつしか、訪い来る人もいない門を閉ざし、

そば降る雨に打たれながら、

野菜を育てて暮らすようなことになったりするのだろうか。

さしずめ今日のところは、

お上より三日の休暇を頂戴したので、

自分がいまどこにいるのかわからないくらいに、

ぐっすりと眠りたいと願うのである。

■次韻柳子玉見寄

同じ頃に、柳瑾（字は子玉）が都みやこにきて、すぐに出て行った。柳瑾の

息子は、蘇軾の伯父の蘇洵^{そ かん}の娘と結婚していたので、柳疇と蘇軾は姻戚関係にあった。

雷が軽やかに鳴ってぱらぱらと雨が降り、
暁に及んできれいさっぱり晴れ上がった。

春の泥は着物の裾を汚すほどではなく、
行楽によろしい時節になったのだ。

しかし、酒はあるけれど、
門から出たところで良い友がいないので、

仕方なく書物を漫然と眺めていると、
貴君の詩が届き、

「間もなく寒食ともなれば、
遥か遠くの故郷に思いを馳せ、
酒を携えて帰りたいと、
居ても立ってもいらなくなることでありましょう」

まさにその通りだ。

貴君からの迎えがあったなら、
仮病を使ってもたいいぶるような野暮な真似はしないで、
何が何でも行くつもりだ。

(仮病にまつわる有名な故事がある。大意を理解するには、何かを踏まえているのだ

ろうと察してもらうくらいで十分であろうか)

■送銭藻出守婺州得英字

2月に、蘇軾は再度皇帝に意見書を提出したが、やはり聞き入れられるところとはならなかった。

3月に、^{せんそう} 銭藻が^ぶ婺州の長官として都から出て行くのを見送った。送別の宴で銭藻がまず五言絶句を詠み、それに使われた 20 個の文字を一つずつ出席者に配り、それを韻にして各々が詩を詠んだ。蘇軾には「英」の字が割り当てられた。

(銭藻は名家の出身で、風格があり、人々から「長者」と呼ばれていた。実力主義の宋代であっても、皇族や特別の家柄はやはり重んじられた。銭藻は江戸時代でいえば外様大名の子孫に当たる。^{とう} 唐王朝が亡んだ後、各地に地方政權が分立する^{ごだいじゅこく} 五代十国時代となり、「十国」の一つに^{こう} 杭州を都とした^{ごえつ} 呉越国があった。銭藻は、呉越国の創始者の^{せんりゅう} 銭鏐の五世の孫。呉越国は銭氏のもとで比較的安定した数十年を過ごし、経済的、文化的に豊かであった。宋による天下統一が見えてきたとき、呉越国は宋との決戦に出ることなく領地を差し出したことから、銭氏は宋の朝廷で優遇された。銭藻は皇帝のブレーン集団の1人として長らく朝廷にいたのだが、改革派と意見が合わずに都から出るようになった)

高い志を持った人は、

都の宮殿の内で安楽に過ごすのは好まないとされ、
優れた手腕の持ち主は、
問題山積の地において仕事をするのを好むという。
貴公は地方官の辞令を得て、
朝廷で着用していた衣類を、田舎の清流で洗うことになった。
これから行かれるのは、山水がまことに佳いところだ。
まだ着かないうちから、貴公の心はすでに清らかになるであろう。
赴任の途中で貴公は故郷に立ち寄り、
土地の人々は酒を携えて喜んで郊外に出て貴公を迎えるであろう。
貴公はこのたび願うところを得たわけだが、
残る者は悲しい思いに沈んでいる。
我が君は賢人を求めることに急で、
日の暮れるまでずっと邇英閣じえいかくに出ておられる。
昔、燕国えんの昭王しょうは黄金台がくきを築いて楽毅を招き、
楽毅は軍事力の増強と他国との連携を図り、
宿敵せうの斉国と戦った。
燕国は勝利を重ねたけれど、
最終的な勝利を得るには至らず、
昭王が死んでしまうと楽毅は亡命し、
黄金台は虚しく朽ちてしまった。

ちよう こうせい ぐけい
趙国の孝成王は宝玉をもって虞卿を招き、

虞卿は王のために種々の策を建てた。

その策は巧みであったけれど、

趙国の衰退は加速するばかりで、

虞卿自身も窮乏のうちに晩年を過ごさねばならなかった。

楽毅や虞卿のような者を招くに忙しいいまの朝廷にあって、

貴公は卑下することなく、義を説き続けた。

しかし、その声は高い山に虚しくこだまするだけであった。

別れに臨んで、これ以上の言葉を尽くすのはよそう。

酒が醒めて後に、

言い過ぎたと我ながら驚かなければならなくなるだろうから。

(蘇軾は「英」の字を皇城にある邇英閣の名に用いた。このころ皇帝と王安石は改革の実行部隊となる人材を朝廷に集めるのに忙しかった。その一方で錢藻のような昔から仕えていた人々は外に出ることを余儀なくされた。そのことを、歴史上の故事を引いて、かなり痛烈に批判したのである。この詩に引かれた楽毅について蘇軾が論じているのを第2章4ページですで見ている)

■送安惇秀才失解西帰

4月、安惇あんじゅんという若者が科挙に落ちて故郷に帰るのを見送った詩。

旧くから伝わる書物を、
厭うことなく繰り返し繰り返し熟読し、
さらに深く思うならば、
君は自ずから全てを知るであろう。
そうなったならば、高い位に昇るのは、
もはや免れようとしてもできるものではない。
いまこの足踏みをいつまでも続けていられはしないのだ。
かつて私は、人々との交わりを絶って家に籠り、
勉強に専念して、庭の花さえ見る暇もなかった。
その後、官位を慕って東にきて、
学問を捨て、子供の戯れ事のような政界に飛び込み、
愚かな百の企画、誤った百の計画は、
全て成し遂げられないままに、
白髪だけが約束事のように増え続けた。
故郷の山には私が植えた松がある。
それは着実に成長し、
じきに抱えるばかりの太さにまでなるだろう。
その木のもとに帰れるのはいつだろうか。
全ては運命の定めるところなのか。
官界での私のこの十年は、

ばかばかしいとたばたでしかない。

だとすれば、君が故郷に帰ると私は都に残ると、
一体どちらが得るものが多く、どちらが失うものが多いのか。

君との別れに臨んで、長く嘆息するのである。

（この詩の冒頭には、科挙の改革に対する批判が置かれている。蘇軾は古典を深く学んで人格を陶冶することを重視した。「故郷の山には私が植えた松がある」とは、父と妻を葬った墓地のまわりにたくさんの松を自ら植えたことをいう。蘇軾は少年時代に松の植林技術を会得していた。故郷の松は後の詩にもしばしば見られる）

■送呂希道知和州

呂希道が和州の知事として赴任するのを見送った詩。

去り年かいには、貴公が解州の知事になるのを見送り、
今のこの年には、貴公が和州の知事になるのを見送る。

人が地方に赴任するのを繰り返し見送る間に、
私の胸はらわたや腸ちりあくたは、都の塵芥でいっぱいになってしまった。

貴公の家は三代にわたって朝廷の重臣を出し、
貴公に至っても貴さはなお続いている。

鳳おおとりの雛は生まれながらに鳳に、
名馬の子は生まれながらに名馬になるように、

貴公に伝わる非凡な風格を見れば、
 必ず剣を帯びたまま皇帝のもとに伺候するようになると思われる。
 しかしながら、
 貴公は小さな町から馬に乗って都に帰ってきたばかりで、
 今度は船に帆を上げて、
 また小さな町へと慌ただしく出て行かなければならない。
 私こそ、川や海をさすらうのが性に合っているはずであるのに、
 恥を忍んで、こらでうろろしている。
 貴公を見送り、言葉なく嘆息する。
 ああ、河の水はかくも美しく、
 かくも遥かにどこまでも流れて行く――

■跋文与可墨竹

蘇軾にとって厳しい日々が続いていたが、その中でも心のなごむことはあった。5月に次男の蘇迨そたいが生まれた。王閏之おうじゆんしが初めて生んだ子である。また、同じ頃に、文同ぶんどう（字は与可あざな）が上京してきたのは蘇軾にとって大きな救いとなった。文同とは姻戚関係があり、官員として先輩で、画を得意とし、ひたすら竹ばかりを描いていた。蘇軾が鳳翔にいたころに交流があり、画の手ほどきを受けたようだ。これは文同が墨で描いた竹の画に添えた小文。

かつての文同は、質の良い紙を見ると、すぐに気持ちが昂ぶり、居ても立ってもいられなくなり、自分で自分を制止できないままに筆を揮い、竹を描いたものだ。描き終えた墨の竹を人々が争うようにして持ち去っても、文同は少しも惜しみはしなかった。

その後、人々が筆と硯を用意して待ち受けるようになると、文同はもそもそした挙句に、ぷいと逃げ去るようになった。人が何とかして頼み込んでも、一年経っても、二年経ってもなかなか描いてもらえなかった。

ある人がその訳を尋ねると、文同はこう言った。

「私は、道を学んで理解できないところがあると、思いが停留してどうすることもできなくなり、それが一気に噴出すると、墨の竹となったのでした。それは私の病やまいであったのでしょう。今はたぶん病が癒えたのだと思います」

しかし、私が見るところ、文同の病はまだ治っていない。身の内に納めていられないものがあれば、どうしたって発せずにはいられはしないのだ。私はその発する頃合を見計らって竹を描いてもらい、その画を我が物とした。こうして文同の病を利用するのは、実は私にも同様の病があるからなのだろう。

(蘇軾に同様の病があることは第1章 31 ページで見た「南行前集敘」に記されている通りである)

■送劉放倅海陵

8月、劉放^{りゅうはん}が都を去るのを見送った詩。劉放は第2章55ページに登場した長安の劉知事の弟である。

詩の2行目にある阮籍^{げんせき}は晋の時代の「竹林の七賢人」の1人で、その人について詠んだ詩が第1章59ページにあった。

貴公は知っているだろう、
 阮籍が人の良し悪しを決して口にしなかったのを。
 吾輩には舌があり、硬い歯があると、誇ってはいけない。
 舌や歯は、旨い酒を飲むためだけに使うのがよい。
 書物なんぞはたくさん読まないのがよい、
 詩なんぞは巧みてないのがよい。
 貴公がこれから行く海辺の地は何もないところだ。
 毎日毎日酒に酔っていればよい。
 間違っても夢に朝廷を見たりしないのがよい。
 私は来るべき春の味覚を貴公と楽しみたいと思っていた。
 しかし、昨夜、庭の木に秋風を感じたばかりであるのに、
 貴公はもう遠くに行ってしまうのだ。
 貴公は行ってしまっていていつ帰るのか。
 貴公が植えた桃の木に花が咲くのはいつの春なのか。

すっかり白髪になってしまった貴公が、
その花を愛でることになるのだろうか。

■送蔡冠卿知饒州

さいかんけい

蔡冠卿を見送った詩。蔡冠卿はある刑法の解釈を巡って王安石と激しく論争し、議論では負けなかったが政治力によって敗れ、都を出て行かざるを得なかった。

貴公が人と交際しているありさまを見ていると、
大きな声で笑いながら語るのでは、
貴公が一番だといってよい。
まことに大らかであり、
おやっど怪訝に思わせるようなおかしなところはない。
しかし、何か事があったときに、
うかつ
迂闊な振る舞いに及んでしまうのでは、
私以上であるようだ。
前に落とし穴が見えていれば、
誰だって気を付けるし、
道に金銀宝石がばらまかれていれば、
誰だって拾おうとするだろう。

そういう場面で、世間の人はころっと変わり、

かたぶつ

堅物だと評判だった人が、

たちまちぐんにやりしてしまったりするものだ。

貴公ときたら、

たった一人で昔の法規を守り続けようとしたために、

船を漕いで遠くに行かねばならなくなってしまった。

まことお気の毒さまである。

天をも駈ける馬が、

そらののろまな牛の後ろにくっついて、

ひよひよこ歩かなければならなくなったと、

嘆いたりなさんな。

猛火の中に投げ込まれてこそ、

宝玉はその真価を発揮するというではないか。

世間の事は一炊の夢のようなものだ。

人生がどこまでもがたがた道ということでもないだろう。

貴公が法の基本を順守しようとしたことで、

救われた者も多くあったのだから、

貴公自身には返ってこなくても、

その徳の報いは、必ず貴公の子孫に及ぶであろう。

■送曾子固倅越得燕字

8月、曾鞏そうきょうを見送った詩。送別の宴で韻字として蘇軾には「燕」の字が割り当てられた。

(詩の冒頭に「醉翁すいおう」とあるのは歐陽脩おうようしゅうの号で、曾鞏は歐陽脩の弟子だった。曾鞏と蘇軾は同じ年の科挙に合格した「同年どうねん」で、第1章64ページで見たように、第二次試験で首席になった)

醉翁の門下生はにぎやかにどっさりいて、
いずれ劣らぬ粒ぞろいであるから、
優れ者であるとしてそこから現れ出るのは難しい。
咲き乱れる多種多様な花の中で、
貴公ばかりはひときわ高い香りを放ち、
南方から都に出てくるなり、
たちまち醉翁と並び立つまでになった。
その醉翁が今は地方の町に逼塞しているのだから、
弟子もやはりそうなるのが当然であるとして、
都を去ることになったのだろうか。
それとも、昔々漢の皇帝に数々の提言をした賈誼かぎと同様に、
諸大臣に煙たがられて地方に追いやられるということなのだろうか。
戦国時代の名将楽毅がくきは活躍し過ぎて亡命を余儀なくされたけれど、

晩年には故国燕えんとの縁を回復させた。

だから、これから行く地の新鮮な魚の味にすっかり魅了されて、
もう都の生臭い肉などは食わない、などということには、
たぶんならないであろう。

とかく世間はロウるさく、
耳の中で蝉がわんわん鳴いているようなものだ。

できることなら、
都のあたりに巨大な池を造って、
大鯨のような貴公の大きな才能を、
自由自在に泳がせたいものだ。

(送別の詩がこのように連続するのは、蘇軾と意思を共有できるような人々が続々と都を去って行ったからである。これらの一連の詩からも、蘇軾が体制側に対して遠慮することなく自由にものを言っていることが知れるであろう。それがために蘇軾は次第に厳しい立場に追い込まれて行った)

■書六一居士伝後

歐陽脩はしばらく前から地方に出ていて、まさにこのころに政界から完全に引退する決意を固めた。

(欧陽脩は引退を朝廷に願ろくいち こじい出て許可されると、自ら「六一居士」と号し、その意味するところを「六一居士伝」に記した。

私はじょざん滁山ずいおうに流されたときに「醉翁」と自ら号した。あれからすでに古い、すでに衰え、かつ病んだので、いよいよえいすい潁水のほどりに引退することにし、ここにさらに「六一居士」と号することとなった。

ある客人が問うには、

「『六一』とはどういう意味なのでしょうか」

居士が答えるには、

「吾が家には蔵書が一万巻あります。三代以来きんせきの金石の遺文を収録したのが一千巻あります。琴が一張あります。囲碁の盤が一局あります。そして常に置いてある酒が一壺あります。『一』とはこれらのことです」

客人が言うには、

「それでは『五一』なのではありませんでしょうか」

居士が言うには、

「吾が一人の翁がいて、この五つの『一』の間で老いております。というわけで『六一』ということになりませんか」

客人が笑って言うには、

「先生はしばしばその号を変えておられますが、いわゆる『名から逃れようとする者』、つまり、世の評判から逃れようとする人なのではないでしょうか。しかし、それは、かのそうじ莊子の譬え話にある『影を畏れて走った者』と同じになってしまうのではないのでしょうか。影を畏れた者は、影がどこまでも付いて回ってくるのを憎み、一日中逃げ回ったあげくに、疲労困憊して死んでしまったといひます。私は、先生が疾走して、ひどく喘ぎ、死ぬほど喉を乾かして、しかし逃げ切

れないているようにお見受けいたします」

居士が言うには、

「私は、もとより、名から逃れられないことを知っています。そして逃れるべきではないとも知っています。私が新たな号を名乗るのは、自分の楽しみをいささか志^{しる}そうとするだけです」

客人が言うには、

「その楽しみとはどういうものでしょうか」

居士が言うには、

「私の楽しみは^{みち}（道）と一つになるより勝るともいえましょうか。楽しみ^{ころ}の意を五つの『一』の間において得ることができたならば、泰山^{たいざん}が身の前にあっても目に入ってきてませんでし、落雷が柱をへし折ったところで驚かないでし^{どうてい}ょう。洞庭の野で聖人を称える壮大な音楽が演奏されても、涿鹿^{たくろく}の原で極悪の敵を打ち破る大きな合戦が行われても、その心地よさ、その快さには及ぶものではありません。しかし、五つの『一』の間での吾が楽しみを極められないているのを、これまで私は常に患っていました。私にまわりつく世事がたくさんにあったためです。その大きなものは二つです。第一が官服、官印等で、それは外側から私を疲れさせます。第二が憂患、思慮等で、内側から私を疲れさせます。私の肉体は病いではなくてもすでに悴^{かじ}み、私の心は老いるよりも先に衰えてしまって、五つの『一』の間で楽しむ暇がどこにもありませんでした。それで私はこの三年の間、身を退くことを朝廷に願ひ出しておりました。ある日、陛下は惻然とこのことを哀れまれ、引退することを許してくださいましたので、この五つの『一』とともに我が身は田舎の廬^{いおり}に帰れるようになり、かねてからの願ひが叶うこととなったのです。これが私がい^{しる}ささか志そうとするところのものです」

客人はまた笑って言うには、

「先生は官服、官印等が身体にまつわるものであるのを御存知ですけれど、五つの『一』が心にまつわるものであるとは思われませんか」

居士が言うには、

「そうではありません。官服、官印等がまつわって私をすでに疲れさせ、たくさんの憂いを生みましたけれど、五つの『一』はすでに私を解き放ち、幸いにも患うところのものはないのです。私はどちらを選ぶべきでしょうか」

ここにおいて客人は立ち、私の手を取って大いに笑って言うには、

「まったくもって比べるまでもありません」

そして、居士が嘆息して言うには、

「そもそも士大夫たる者は、若いときには仕え、老いては休んでよく、七十歳まで待たなくてもよろしいとされています。私はもともとその考え方を慕っておりました。官職から去るべき第一の理由がここにあります。私はかつて大事な御用を勤めさせていただきましたが、称賛を

ほしいまま
縦にしようとする気はさらさらありません。官職から去るべき第二の理由がここにあります。壮年の頃からそのようにあるべきと考え、今はすでに老いかつ病んでおります。強いて身を働かせようとしても難しく、それでいながら過分の榮禄を貪るのは、まさしく本来の志に違ひ、自分の日頃の言辞を根底から覆すものです。官職から去るべき第三の理由がここにあります。去るべき三つの理由があるのですから、たとえ五つの『一』がなくても私は去るべきなのです。これでもう言うべきことは尽きましたでしょう」

熙寧三年九月七日、六一居士自らかく記す。

このとき歐陽脩は64歳だった。24歳で科挙に合格して以来、政治改革ならびに文学改革の闘士として長年闘い、引退の本当の理由は別にあるとしても、政治的なこととは別の次元の価値を自分の行動に見出そうというのがこの「六一居士伝」であるのだろう)

蘇軾は「六一居士伝」を読んで、次のような感想を記した。

私は言おう。

「六一居士は^{ゆうどう}有道の者^{みち}(く道を身に具えた人)であるのでしょ

それに対してある人は言う。

「六一居士は有道の者とはいえますまい。有道の者なら、懐に抱える物などなしに、安らかにしていただけるのではありませんかな。六一居士は五つの物を所蔵しています。六一居士は世間の人々が争って^ましがかる物には見向きもしませんけれど、世間の者が棄てるような物を拾っています。そのようなことをして、有道の者であるといえるのでしょうか」

私は言う。

「そうではありません。五つの物を懐に抱えて後に安らかにしていただけるのなら、それは物に惑わされていることになりましょう。五つの物を棄て去って後に安らかになるのも、やはり惑わされています。六一居士は初めから物にまどいつかれてなごいません。立派な服も、立派な車も、官位の印しも、つまりは地位にまどいつか

れてなどいないのです。まして、五つの物にまといつかれているわけではありません。物に惑わされるのは、物を吾が物にしようとするためです。吾も物も何かしらわけがあって天地の間に形を受けたのでありましょう。吾は吾、物は物でありますから、どうして物を吾がものとする事ができるのでしょうか。ある種の人は物を吾がものにして、これは得れば喜び、これを失えば悲しみます。いま六一居士が自ら『六一』といわれるのは、その身と五つの物をひとしくそれぞれ一つの物であるとしているからであります。六一居士が五つの物を己のものにするとか、五つの物が六一居士を己のものにするとか、そういうことではないのです。六一居士と五つの物とは等しい関係にあって、お互いに己のものとする事はないのです。ですから、得たり失ったりということもそもそもありません。このようなことから、私は、六一居士は有道の者であるというのです。もし一と五とが向き合っているのなら、六一居士の存在は浮き上がってはっきりと見てとることができましょう。五とともに一があって六になっているのなら、いずれが五でいずれが一という区別はなく、つまり六一居士だけが浮き上がって見えることはありません。つまりは、六一居士はすっかり隠れているということになりましょう」

(この文章で、六だ五だ一だと、何か言葉の遊びでもしているように見えるが、要は歐陽脩の引退について、政治的発言を避けつつ賛意を示したということであるのだろう)

(第1章 42 ページで見たように、蘇軾は8歳のころ、郷里の寺子屋の師匠から、都ほんちゆうえんでは范仲淹、欧陽脩、富弼、韓琦おうようしゆう ふ ひつ かん きらが停滞する政治を変えようとしているという話

を聞き、いつしかその人々とともに国のために働けるようになりたいと心に強く思った。范仲淹らは幾度となく国政の改革に挑み、しかし守旧派の頑強な抵抗に遭ったり、思わぬ事態が出来たりして、ほとんど成果を上げられなかった。范仲淹は先に亡くなり、欧陽脩は前の皇帝のときに、自ら改革の指揮を執る好機を迎えながら、ある論争に巻き込まれて疲労困憊して改革に着手できずに終わってしまった。宋は改革の度重なる先送りによって危機的な状況に陥り、ついに神宗皇帝と王安石がかつてない大規模かつ徹底した改革に乗り出したのである。欧陽脩、富弼、韓琦は元来は改革を志向していたにもかかわらず、新たな改革があまりにも急進的であったために強く反対した)

■墨君堂記

先に見たように、都において真に心の許せる友として文同ぶんどうがいた。文同はもっぱら竹を描き、その画を納める建物を作って「墨君堂」と名付けた。その由来を書いたのがこの文章である。「墨君」とは墨で描いた竹のこと。

一般に人が人を呼ぶとき、相手が貴人きうじんであれば「公」といい、相手が賢人けんじんであれば「君」といい、それ以下であれば「爾じ」とか「汝い」とかいう。公卿こうけいの身分にある人に対して、その地位に畏れはしても、心に服さないときには、世間の人々は公的な場では「君」といいつつも、私的な場で

は「爾」とか「汝」とか言って軽んじるのはよくありがちのことだ。

かつて、王徽之^{おうきし}が人から空き家を借りてしばしの仮住まいをしたときに、すぐに竹を植えたので、

「どうせじきに出て行くのだから、何もわざわざ『爾』^{それ}を植えるまでもなかるうに」

と、ある人が言った。

王徽之は、

「かの『君』なくして一日も過ごせるものではない」

と、答え、それ以来、天下の人々は、竹は必ず「君」の敬称で呼ぶようになった。

文同は墨で竹君^{ちくくん}の姿^{かたど}を象るのを得手としている。文同は墨で竹を描いた「墨君」を納めるための堂を作り、竹君の徳^{ほめ}を頌たたえる文章を書いてほしいと私に言った。文同が竹君に寄せる思いはまことに厚いものがある。

文同の人となりはといえば、沈着冷静でありながら華やかさがあり、聡明冷徹でありながら真心がある。潔さを身に具え、広く物事に通じようと、朝夕に己を磨く努力を重ねている。文同と交際したいと願うのは、一人だけだということは全くないのだが、文同が厚く思いを寄せるのはただ一人、竹君だけである。

竹君は飾り気がなく、しなやかで強い。人の耳、目、鼻、口を楽しませ

る声や色や香りや味はない。文同が竹君を厚く思うのは、竹君が賢君であると考えるからだ。

世間というものはなかなか厳しい。人を震え上がらせたり、冷や汗をぐっしょりかかせたりする。だからといって、霜や雪や風や雨が直接に肌に当たる厳しさほどのことはない。それでも、世間の厳しさに挫け、己の保持するところのものを見失ってへらへらしている連中は少なくない。植物を見ても、季節の移り変わりに応じて大きく変わるのが普通だ。しかし、竹君だけは四季に左右されるところがない。

竹君は賢君であると、文同でない人も言いはする。しかし、文同こそは竹君を最も深く理解し、竹君が賢君である真の理由を最もよく知っている。文同は談笑しながら筆を執り、獅子奮迅の勢いで墨を注ぎ、竹君の徳をことごとく描き切る。

文同は、竹君の幼い姿も、成長した姿も、老いた姿も描き、折り曲げられて一度は伏してもすぐさま立ち上がる勢いを描き、風雪の厳しさの中でも保っている本性を描き、切り立った崖にあっても真っ直ぐに伸びようとする志を描く。思いのままに大きく成長して高々と茂っても驕らず、思いの通りにならなくて小さく低いままでも恥じ入りはしない。群がり立っても依存し合わず、一本だけでも恐れるところはない。

文同は竹君の情を完全^{こころ}に理解し、その本性をことごとく描き切る。

私はまだまだ竹君を知っているとはいえない。文同に習って、文同の墨

君の弟や子や孫や友人の象かたちを描いてみたいと思っている。行く行くはその画を我が部屋に納めて、墨君堂の別館ということにしたいものだ。

■送文与可出守陵州

熙寧きねい4（1071）年、蘇軾36歳。

厳しい政治抗争の渦中に置かれた蘇軾にとって、文同との交流は大きな慰めとなっていた。しかし、この年の初めに文同は郷里に近い陵州りょうしゅうの知事として都を出て行くことになった。別れの前に一緒に浄因院じょういんいんを訪れ、この詩を文同に贈った。浄因院の壁にはそこの長老どうしんの道臻に頼まれて文同が描いた竹の画があった。

壁かべに描かれた「墨君ぼくくん」は言語を理解しない。

それでも「墨君」を見れば百の憂いを消すことができる。

我が友は「墨君」に似て、しかも言語を理解する。

友の節義は秋の霜のように純白で凜々しく、

健やかにして清らかな詩を詠み、

思想性は道家の真骨頂に迫る。

地位を下げられても意に介することはない。

暁の風に髪を自在になびかせて、

舵を操って長江を遡って行くことだろう。

川を巡る山々が朝焼けに赤々と照り映え、
千山のそのまた彼方に友の行く陵陽りょうようはある。
我が友は、遠く別れて行ってしまうと、
私の心持ちが悪くなるのを知っている。
だからこの「墨君」を見て、
己の憂いを解くようにとってくれるのだ。

■朱寿昌郎中少不知母所在刺血写経求之五十年去歳得之蜀中以詩賀之
文同は前年の春に上京した際に、とある町で朱寿昌しゅじゅしょうという者とたまたま
同宿し、身の上話を聞いた。

(朱寿昌の父は官員で、長安にほど近い町に赴任していたときに、何かの事情で妾の
劉りゅう氏を残して別の任地に移った。そのとき身ごもっていた劉氏は実家に帰って朱寿昌
を出産した。劉氏は間もなく党とうという人と結婚し、朱寿昌は父の元に引き取られた。
こうした事情を朱寿昌は7歳のときに初めて知り、いつしか生みの母に会いたいと思
っていたのだが、その機会もないままに50歳になった。ある日、このままでは決して
母に会えないと思うと居ても立ってもいられなくなり、ただちに職を辞し、「母に会
うまで戻らない」と家族に言い置いて旅に出た。それ以来、自分の血で経を写して願
を掛けるなどして懸命きんに探し、ようやくわずかな手がかりを得たのでこれから金州に
向かうところであると、文同に話した)

文同は都に着くと、朱寿昌のことを人々に話し、そうこうするうちに長

安から、朱寿昌が母親に会えたとの報せがあった。皇帝は母子の再会に感動し、朱寿昌とその母を都に呼び寄せ、朱寿昌を褒め、本人の希望を入れて母の郷里に近い町の知事に任命した。朱寿昌が都を去る際に、大勢の人が送別の詩を贈り、蘇軾もこの詩を贈った。

ああ、貴公が母のことを初めて知ったのは七歳のときだった。

ああ、貴公の心の苦しみは成長するにつれて強まった。

ああ、貴公は老いに臨んでついに母と会うことができた。

喜びが極まり、涙が雨のように流れるばかりで、言葉は出なかった。

貴公は、宰相の地位に昇ることも羨ましいとは思わず、

貴公は、仙人になって天に昇ることに憧れもせず、

母の前で赤ん坊の服を着て、

赤ん坊の泣き声で甘えることを宿願として、

五十歳にしてようやく成し遂げたのだった。

竜を煮て、宝玉を酒に変えて母のための祝いの膳とし、

千年万年の寿命を祈った。

皇帝は美しい駕籠を使わして母を宮中に迎え、

金文字の詔書で貴公を官職に戻された。

貴公が母と別れ、そして再会した経緯を聞いて、

私は強く感じるものがあった。

現代ではこのような事例を他に聞かないが、

昔にさかのぼればなかったわけではない。

漢の武帝は、

母がかつて卑しい身分にあったときに生み落とした姉がいると聞き、

自ら尋ね回って姉を宮中に迎えた。

漢の大將軍の霍去病は、

夫なき母より生まれたのだが、

遠征の途上でついに父を見付け出した。

隋朝のある皇后は、

自分には親族が一人もないのを日頃から悲しみ、

ある農夫が「おいらの叔母は皇后様だ」と自慢していたと聞くと、

すでに死んでいたその男に高い位を贈った。

唐朝のある皇帝は、

自分の生母を知らないままに育ち、

戦乱で行方不明になったと後に聞くと、

四方に命じて捜したのだが、

ついに会うことはできなかった。

ところが、ある男は、

先々大臣になるまで帰らないと言って故郷を出ると、

母が亡くなったと聞いても、本当に帰らなかった。

とかく地位を優先する者が多い世の中であるから、
貴公を見て我が身を取じる者が、
果たしてどれほどいるのだろうか。

（この詩の最後には実は痛烈な皮肉が篋められている。世には必ず時流に迎合しようとする者が現れる。改革に反対する人々が続々と都を出て行く一方で、改革の実行部隊となる人材が集められた。改革の理念を本当には理解していないのに、改革派のふりをして政権の中枢に入り込もうとする者が大勢いた。王安石は、改革に賛意を示した者はすぐに採用した（人は安易に嘘を言ったりしないと王安石は思っていたようだし、自分は決して騙されないと王安石は信じていたようだ）ので、本章 61 ページで蘇軾が指摘したようなことが起こって、レベルの低い人間が朝廷に並ぶようになった。その一人に李定^{りてい}がいて、亡き母の喪に服すべき期間にあることを隠して急いで都に上り、改革を称賛して王安石からにわかに高い地位を授かった。李定は王安石への忠誠心を示そうと、反対派を様々な罪に無理やり陥れようとした。李定の仲間の謝景温^{しゃけいおん}は蘇軾を標的とし、蘇軾は父の棺を船に載せて郷里に帰る途中で違法な商取引で利益を得ていたと告発した。蘇軾は皇帝の信頼を失い、一時期難しい立場に追いやられた（この詩のころには疑い^り晴れていた）。蘇軾は朱寿昌を褒める一方で、暗に李定を批判したのである。李定はこのことを恨み、数年後に恐るべき復讐をする）

■題趙岷屏風与可竹

文同が去ったのは蘇軾にとって大きな喪失で、趙岷^{ちょうごつ}という人が所蔵する

文同の屏風画に次のようにその思いを記した。

文同が行くところではいつも、口からは詩が溢れ出るし、手からは竹が描き出される。文同は都にきて一年にもならないのに、地方に出ることを願って、故郷に近い町へと去り、詩も画もみな西に行ってしまった。一日でも文同を見ないと、文同のことが想われてならない。文同という人はいか厳めしくも冷静で、とげとげざわざわした気分を静めてくれるし、せこせこぺらぺらな気持ちを厚くしてくれる。

いまやここを去ること数千里。その詩は求めることはできるだろうし、その竹の画は描いてもらうこともできるだろう。しかし、その静めて厚くしてくれるところのものはもうないのだ。私は竹の画を眺めて嘆くしかない。

■浄因院画記

5月、浄因院のどうしん道臻長老(本章93ページ)に頼まれて次の文章を記した。

かつて私は次のように画を論じた。

人物、動物、建物、器物などには皆それぞれに固有の形、つまり「じょうけい常形」がある。山や石や竹や木、あるいは水や波や霞や雲には決まった「常形」はないけれど、それぞれに固有のじょうり本質、つまり「常理」がある。

画を描いて「常形」を失ってれば、人は誰もがそれに気付く。しかし、「常理」から離れている場合には、画を理解している人でも気付かないことがある。だから、世間を欺いて画で名を成そうとする者は、必ず「常形」のないものを描くのである。

画を描いて「常形」を失った場合には、そのものの形がおかしくなるだけで、画全体が台無しになってしまうわけではない。しかし、「常理」が当たらない場合には、画全体がすっかり駄目になってしまう。「常形」がないだけに、よくよく謹んで「常理」に心を用いなければならないのである。

「形」を徹底的に正確に描き切るのは、世間の技量の優れた人なら為し得るところである。「理」までを画に描いて見せてくれるのは、世間から超越した「高人^{こうじん}」であり、卓抜した才能「逸才^{いつさい}」の持ち主でなければならない。

文同が描いた竹、石、枯木は、まことにその「理」を得たというべきである。その画を見れば、竹はこのように生じ、このように死に、このように屈まり、このように曲り、このように痩せ、このように縮まり、このように枝が伸び、このように葉が茂るものだと、人の心を十分に満たしてくれる。根、茎、節、葉、牙、角、脈筋は千変万化し、始めから終わりまで同じものはないのだけれど、それぞれが全てあるべきところにあって、天の造化の「理」に合致していると、完全に人を得心させる。

それはすなわち画を見る者が、達人の精神の内に包み込まれるということであるのだろう。

文同はかつて浄因院の方丈にふた群れの竹を描いた。そして、西に出てりょうよう陵陽に赴任するに当たり、浄因院の長老の道臻師に別れを告げにきて、私も同行した。文同は方丈の隣の部屋に、二本の竹と一本の枯木を描き、さらには本堂の四方の壁を白く塗り替えたばかりであるので、そこにも竹を描いてくれぬかと道臻師に頼まれた。文同は快諾し、そうした経緯を私が記すことになった。

後にここに「理」をよく知る者がきて、深く文同の竹の画を観るならば、私がここに書いたことが妄言ではないとわかってくれるであろう。

(これは文同との交流から生まれた独特の画論である。蘇軾はこの後、数々の画論を記すが、蘇軾の思索の特徴がここによく表れている)

■ 出都来陳所乘船上有題小詩八首不知何人作有感余心者聊為和之

これまで大勢の人々を見送ってきた蘇軾も、とうとう都にはいられなくなり、7月に杭州の副知事として都を離れることになった。

杭州までは船旅で、都の中を貫通するさいが蔡河を下って南に向かった。船室の壁に誰かが詠んだ8首の詩が記されていたので、蘇軾は旅の折々に、その詩と同じ韻を用いてやはり8首の詩を作った。

其の一

船着き場の青い草の内で鳴く蛙、
川の合流点に垂れる柳の内で騒ぐ蟬、
そして偶然ここに居合わせた旅行く私——
新たに雨が通り過ぎる。

其の二

鳥が楽しむとき、獲り網があるのを忘れ、
魚が楽しむとき、釣り餌があるのを忘れる。
安らかにいられる場所はどこかと選ばなくても、
流転してやまぬ広大な天下には、ここというところがきつとある。

其の三

炊事の煙が村から上り始め、
朝日が投げかける光はまだ弱々しい。
田園はどことも懐かしさを誘うのに、
どうして郷里に帰らずにいるのだろうか。

其の四

私の旅は速くもなく遅くもなく、

軽やかな櫂の動きにゆらりゆらりと進んで行く。

船が止まると村の市はにわか賑わい、

水門が開くと勢いついた波が川にみなぎる。

其の五

船上の人間は炎熱に一日苦しめられ、

高い木々に囲まれた入り江に船を停泊させる。

空にはまだ月が上ってこないかわりに、

黒い雲が今にも崩れそうな形でそそり立つ。

其の六

地上の万の穴が一斉に共鳴するかのように雷が轟き、

天上の池の水をまき散らすかのように風が吹き過ぎる。

雷と風が撃ち合う騒動は一瞬にして終わり、

天空に北斗と南斗がかかる。

其の七

ここはえいすい潁水であってかんすい漢水ではない、

しかし、水は同じく若い葡萄の実の色をしている。

もしも漢水であるのなら、我が故郷へと通じ、

子供等が懐かしい童謡を歌うのが聞こえてくるであろうに。

(蘇軾えいすいを乗せた船は蔡河かんすいから潁水に入った。漢水は故郷の蜀を源とする川で、第1章 51 ページに漢水を詠んだ詩があった)

其の八

私のこの詩は拙いものであるけれど、

心が平らになるにつれて、調べは良く和すようになった。

年来の煩惱もいずれは尽き、

波の立たない古い井戸のようになるであろうか。

(このときに旅には、妻おうじゆんしの王閏之、長男まいの邁 (13 歳)、次男たいの迨 (2 歳)、乳母にんさいの任採蓮れん、馬正卿ばせいけい、それに林十六郎りんじゅうろくろうの妻と 2 人の息子が同行した。林十六郎は詳しくはわからないが、蘇軾の遠い親類で、科挙を目指している途中で、前年の秋に都で亡くなった。まだ 30 歳だった。その妻は、夫を先祖の墓に葬るためか、親類がいるからなのか、杭州に行くことを希望したので、蘇軾は連れて行くことにした。官職に就いた者は、親類縁者をできる限り援助するのが当たり前とされた。そうした美德が、一族の繁栄を優先する余り官僚が不正を行う誘因ともなった。先に李定が不道徳であったと記したが、官僚となった者は一族の命運を一身に荷い、何がなんでもよいポストを獲得しようとするのである)

■和子由初到陳州見寄二首次韻

前の一連の詩で潁水に入るまでを歌っていたが、旅を最初に戻すと、蘇軾はまず弟がいる陳州を目指した。弟の蘇轍は先に熙寧2（1069）年8月に朝廷から去ることを願い出る文書を提出し、その中で改革を激しく批判して王安石を激怒させた。地方官となる辞令が出たもののすぐには赴任せず、門を閉ざして家に籠った。そして、翌年の1月に父（蘇洵）の恩人である張方平（第1章62ページ）が改革派と対立して都を出て陳州知事になると、蘇轍を州の学校の教授として招き、弟はそれに応じた。弟は陳州に着くとすぐに2首の詩を蘇軾に送った。それから1年半余り経って、蘇軾は都を出て陳州に向かう途中で弟の詩に和して返した。

其の一

孔子の時代から遠く離れ、
 道徳が失われて久しいとはいえ、
 僕らは円熟した人々に出会うことができた。
 その人達も、そして僕らも、もはや老い衰え、
 いまさら実用の学に転じることなどできもない。
 役立たずの独活の大木を決め込み、
 この有り難い御代に阿呆の身を委ねるとするのか。
 昔から、無名の貧乏人であればこそ、

生涯親から離れずに孝行できるというではないか。

己の暮らしこそを大切にしていきたいものだ。

（「円熟した人々」とは歐陽脩や張方平のような人々を指し、皆改革に反対して地方に去った。蘇軾自身も失意のうちに都を発ったのである）

其の二

故郷と別れて三年、

山の松は生き生きと育っているだろうか。

故郷を思い続け、

その心はいつまでも変わらない。

時には、戸を閉ざして夢に故郷を尋ねもする。

行ってみると、僕の愁いを語る相手はそこにはいない。

夢より醒めれば、

やはり、僕の愁いを語る相手はいない。

流れる涙を添えて、

君がいる南の地へと送ろう。

■次韻子由柳湖感物

陳州に着くと、そこで 70 日余りを過ごした。それだけ長期にわたったのは、弟とできる限り長く一緒にいたかったのと、張方平が別の任地に

向かうのを見送る日まで留まったためである。

(張方平は改革に反対して都を出て陳州に知事として赴任した。知事としての任務を誠実に果たそうとすると、中央からの指令に従って改革の実践に努めなければならない。宋代は中央集権の官僚機構が整備され、現場の勝手な判断で中央の指令を無視したり逆らったりすることは不可能であった。張方平は自分の信条と実際の行動の乖離に悩み、実務から離れた閑職に移ることを朝廷に願い出た。張方平は朝廷の大物であったから、それが許されて陳州を去ることになった)

弟が教授を務める州の学校は、町の北側の柳湖りゅうのほとりにあった。柳湖のまわりにはその名にふさわしく 1 万株にも及ぶ柳が植えられていた。弟は柳湖についての詩を詠み、その中で、池の柳と山の松とを比較して、風に靡きやすい柳より、どっしりと構えて動かない松を堅固であると褒めた。それに対して、蘇軾は異なる見方をする。

思えば昔、杜甫とほきしゅうが夔州の東の村にいたとき、
 茅葺のちっぽけな家は青い山の下にあった。
 杜甫は詩を詠み過ぎて辺境の地をさすらう身となり、
 猿や鳥と愁いの声を競ったのだった。
 君もまた都の人から棄てられてしまい、
 いつも独りぼっちで馬に乗って歩み、
 柳湖の一万株の柳だけが、

朝に夕に、君のために清らかな蔭を作って待っていてくれる。

そうであるのに、

柳に対して酷な評価をしたのでは、

柳もがっかりして元気に繁ることができないだろう。

柳は口がきけないし、怒ることも知らないけれど、

君の言い方では世間の人々だっがっかりするだろう。

春の柳の光り輝くさまは、

女性のあでやかな姿の譬えによく用いられる。

ねじ曲がった松の根が、

空腹に苦しむ蛇に譬えられるのとは大きな違いだ。

朝には、柳の葉の緑の蔭は、炎天下の松の蔭より濃いものがあるし、

夜には、柳の枝には、松の枝には見られない揺れる月の光がある。

春には、花が風に乗って雪のように翻り、

秋には、啄木鳥きつつきの虫を啄む音つばが高く鳴り響く。

四季によって、繁っては落ち、繁っては落ち、

寒さにつけ暑さにつけ、盛衰の異なる姿を見せてくれる。

山の松は、積雪に埋もれようと凍え死ぬことなく、

常に同じ緑を保っている。

だからといって、

柳と松とどちらかがより賢いということはないのではないかい。

■次韻張安道讀杜甫詩

前の詩の冒頭で杜甫に言及しているのは、張方平（字は安道^{あざな あんどう}）が陳州にきてから杜甫の詩を熱心に読んでいたからである。張方平は杜甫の詩の感想を詩に詠み、蘇軾はそれに和した。

（唐を代表する詩人といえば杜甫と李白^{りはく}であって、さらには杜甫こそが中国の最大の詩人であるというのが現代ではごく一般的な見方となっているが、杜甫の詩が際立って高く評価されるようになったのは蘇軾の時代のころからで、この詩は後に定説なる杜甫の詩に対する見方をはっきりと打ち出している）

古代の詩の輝きが薄れると、

詩の流れは横暴な君主達によってねじ曲げられ、

宮廷詩人が媚びた賦^ふを作る一方で、

中央から放逐された屈原^{くっげん}が新しい詩の形式を創った。

それからさらに詩は変転し、

崩れもし壊れもし、

たくさんの俊英が現れました。

辺鄙な土地に奇怪な物産が出現するように、

源流から離れたところで詩は狂乱の態を呈した。

厚化粧が真の美しさを凌駕するかのよう^{りはく}に惑わせ、

神に供える神聖な豚や羊よりも生臭い魚えびや蝦が大切にされもした。

今では誰もが知るように、

杜甫が現れ出て、

その名は李白と共に高く並び、

大地はきれいに掃き清められ、

ただ二人の足跡だけが並ぶのを見るようになった。

詩を作る者は追い詰められて苦しむのが常で、

天の意志がそうさせるのだろう。

唐の天下が暗い塵に覆われ、平和が崩れ去ったとき、

皇帝は暴れる化け物を切って捨てようと、

勇猛な武将だけを求め、

文に優れた者は顧みられなかった。

李白も杜甫も失意に沈んで遠く辺境の地をさまよい、

その悲しみの声が遠く万里の彼方に聞かれた。

李白は鯨にまたがって大海の向こうに行こうとし、

杜甫は虎にまたがって大地の向こうに行こうとした。

杜甫の大いなる筆は竜をも退治するものだったが、

官に就いたときにははしがない厩番うまかほどの役しか与えられず、

世知に疎いために、手にした物は何もなく、

あるとき久し振りに大いに酔った日に亡くなったのだった。

今では杜甫の詩を手本とすべしと見られているが、

児童は単にそれをなぞる努力をするだけである。

現代の詩文において、

先頭に立って旗を振る者は誰であろうか。

他ならぬ張方平殿である。

張方平殿は杜甫の詩巻を開いて遙かに思いを馳せ、

会って語り合えないのを残念に思っている。

人は響き合う友を得ることを願ひ、

共に自在に才能を飛翔させるとき、

この天下も狭いと感じるのである。

残念ながら、私には張方平殿に見ていただけるような佳句はない。

たまたま重陽の節句を前にしてお酒を頂戴したので、

菊の花を丁寧に世話し、

草の中に埋没させてしまわないようにしたいと思うだけだ。

(結びの部分は、張方平から教わったことを菊の花に譬えて、守って行こうとの決意を示したのだろう)

■送張安道赴南都留台

張方平が陳州を発つ^このを見送った。詩中にある「我が公」とは張方平のことである。

我が公は古いにしへの仙伯せんはくの生まれ変わりであり、
世俗から超然と抜き出た姿は羨門せんもんと変わらない。
ところが、たまたま世間を救おうなどという志を抱いたために、
俗世に繋ぎとめられることになってしまった。
譬えてみれば、竜が皇帝の御苑に遊びにきたようなもの、
あるいは、鳳凰が皇城の儀式に参列したようなもので、
いつまでもせせこましいところに留まっているはずもなく、
いずれは遙かなる仙界に帰るのである。
我が公は皇居に出入りすること四十年に及び、
ただの一度も自身の憂患を口にすることはなかった。
そして、ふと「帰ろう」と漏らしたならば、
朝廷を挙げて引き止めようとしても無駄だった。
我が君はまことに叡智に溢れ、
草の根を払って有用の士を探し求めておられる。
昔の君主は、
佳よき人を朝廷に引きとめておきたいのなら、
その人の傍らに誠意をもって応じる人がいなければならぬのを、
よく知っていた。
我が公は、「帰ろう」と漏らすと、

すぐに居室をきれいに掃除し、
 そこには何もかもなくなって、日光が差し込むだけとなったのを喜んだ。
 こうして、我が公は、
 万物が生まれ出る以前のところで遊ぶ境地に至ったのだが、
 世俗の人はそのようなことは理解できない。
 私もまた世渡り術に疎く、
 世間においてぐずぐずするうちに、
 鬢に白髪が出るようになってしまった。
 出処進退などはまことにちまちましたことだ。
 いずれ我が公の後を追うときがくるであろう。

(「仙伯」とは仙界における伯爵、「羨門」とは太古の時代の仙人の名。この詩では実務から離れることになった張方平を仙界に帰って行く仙人に譬えている。「誠意をもって応じる人」と言っているのは、都には改革の担い手となる官僚が続々と集められているが、張方平のような先輩に敬意を示さないばかりか蹴落とそうとしていることへの批判が窺われている)

■傳堯俞濟源草堂

傳堯俞ふぎょう ゆという人が引退後は別荘さいげん(濟源草堂)で悠々自適の暮らしをするつもりであると語るのを聞いての詩。

私もしがない役人仲間の一人として、
やはり田園の暮らしに興味を持っている。
いざ老いて身を引くときになって、
どこに廬^{いおり}を結んだらよかろうかと初めて慌てふためいても、
植えた木が立派な蔭を作るには十年どころではないし、
そもそも買い求めるための資金もないということになってしまうに違いない。
先生は、清らかな川の流に臨む地がよいとの占いを得てより、
すでに高い木々が画のような景観を作っているとのこと。
隣近所の人々も竹を愛しているようなので、
春ともなれば、
さぞかしおいしい筍がわんさと出てくるであろう。

（最後の部分は、隣近所とともに竹を愛でて大いに結構であるという解釈も成り立つが、ここでは少々皮肉を交えたとして訳した）

■次韻柳子玉過陳絕糧二首

先に都で会っていた柳瑾^{りゅうきん}（字は子玉）（本章 71 ページ）は改革派に睨まれて降格となり、新たな任地に赴く途中で陳州に立ち寄り、手持ちの食糧が絶えて難儀していると訴えた。それに応えた詩。

其の一

天帝は、

多才である貴公の真価を十分に試そうと、

激しい風雨の真っ暗闇の中を旅させているのだろう。

貴公は、

一羽の鶏が鳴けば、自分も合わせて鳴くようなことはしない。

それがために、

「なんとまあ米櫃がからっぽじゃわい」と、

飯炊き婆さんを驚かせる始末となった。

杜甫という人は、

つんつるてんの着物はいくら引っ張っても膝までこないと詩に詠んだ。

がんしんけい
顔真卿という人は、

家計に無頓着で、数カ月にもわたり一家で薄い粥を啜っていると記した。

苦労を嘗め尽くしてこそ詩人の情味は深くなるものだ。

それでお尋ねするけれど、

貴公はいまどれくらいまで嘗めたのかな。

(杜甫や顔真卿と比べたらまだまだ苦労が足りないと言ったのは、縁者故の気安さからで、「そういうあなたはどうか」という当然の切り返しに対しては次の詩で応える)

其の二

私のごときは、自分で自分に愛想が尽きる。
貴公の他には、誰も羨もひっかけてくれない。
青い灯のもとで夜更けまで貴公と語り続け、
書物の読み方が出鱈目のままで、
年齢だけを重ねてきてしまったことに悲しみを覚える。
若い頃はそうじ 莊子の哲学にのめり込んだのに、
世を救おうなどと、しがない官員になってしまった。
今は南に行く旅の途中で、
向こうで何をするのかといったら、
潮が遡ってくる際の、
一万の太鼓を轟かすような音を聞くだけであるのだらう。

(潮が遡ってくる音とは、せんとうこう かいしょう 錢塘江の海嘯のこと。錢塘江の河口付近は潮の干満の差が非常に大きく、大潮のときには激しい勢いで遡る潮と川の水とが激突して大きな音を立てる。海嘯見物は現在でも錢塘江の観光資源となっている。杭州に行つてすることといえば海嘯を見ることくらいだと、蘇軾は自虐的に戯れたのである)

■陸龜詵説挽詞

りくしん 陸詵という成都の知事が、せいと 新法の弊害を訴え続けている最中に亡くなったと聞き、その死を悼んでの詩。

陸先生の真っ直ぐな節義は衆に抜きん出て、

が び さん
峨眉山よりも高く聳え立っていた。

正しい道を行うことだけを考え、

自分のためになどということはなかったから、

亡くなったときには家にわずかな蓄えさえもなかった。

し せん
四川を行き交う人々は、

陸先生が亡くなったのを皆が悲しんだと聞く。

思えば、陸先生とは都で塵降る中でお見送りしてから三年になる。

陸先生の遺像は成都の思賢閣し けん かくにきつと飾られるであろうから、

ほう しょう
鳳翔で樽酒を酌んで旧交を温め直したことがあるように、

何十年後かにはそこでまたお会いして、

私は涙で手巾ハンケチを濡らすに相違ない。

(思賢閣は土地の偉人の肖像を飾って顕彰する建物)

■陪欧陽公燕西湖

蘇軾は陳州を発って潁州えいに向かった。潁州には政界を引退した欧陽脩が
隠居所を構えていた。弟の蘇轍も同行し、兄弟揃って大恩人に会った。

潁州には西湖せいという風光明媚な湖があり、欧陽脩はそこに2人を連れた。

欧陽脩はこのとき65歳だった。

欧陽公はなお壮年であるのかというと、

髭は雪のように真っ白である。

欧陽公はすでに老年であるのかというと、

頬はてかてかと赤く光っている。

欧陽公のもとに参上すると、

早速湖の畔で美酒を飲むこととなった。

欧陽公は酔えば酔うほど縦横に談じ、

ついには激烈な言辞を吐くまでになる。

湖辺の草木に霜が降りるような季節になったけれど、

芙蓉や菊の花が競い合うように明るく咲いている。

花を手にし、欧陽公の長寿を祝して舞うと、

欧陽公はこのように言う。

「百年生きたところで、

ぴゅうと風が吹き過ぎるようなものだ。

仙人の仲間入りをして遊ぶのも悪くはなからうが、

そのためには飢えを忍んで仙薬を飲まなければならないのなら御免蒙ろう。

若死にするか長生きするか、勝手に決めてくれと、

と疾うから天帝に任せてある。

どっちを選ぶか頭を悩ませるのは天帝であるのだから、

私はこの世で楽しんでいけばよだけなのだ」

視線を上げると、

鳥が町から夕靄の中へと飛び去って行く。

視線を下げると、

灯に照らされた銀の酒缸さけがめが湖の水面みなもに映っている。

この詩を歌って、

まだまだ飲んでいただくとう欧陽公に勧める。

残念であるのは、

我等兄弟には、宴席において琴を奏し、

その音で皇帝と大臣のわたかまりをときほくしたような腕前がないことだ。

(この詩の最後は、そのような故事があったのである)

■欧陽少師令賦所蓄石屏

欧陽脩は考古学の研究者としても知られ、潁州の家には考古学的な資料がたくさん集められていた(本章 84 ページで見た「六一居士伝」には「金石の遺文」という考古資料が「五つの一」の中に挙げられていた)。これは欧陽脩が所蔵する石の屏風を見ての詩。

誰がこの石の屏風を欧陽公のために遺したのか。

石の上に淡い墨の痕があり、

林やら草は描かれていない。

それとなく見えるのは、

雪を載せた^が峨眉^{びさん}山の西の嶺か。

そこには一万年を超える不老の松がある。

嶺に近付こうとしても、

崖が崩れ、谷は断ち切られている。

もやもやと空を覆う霧、

力強く差し込む夕日、

風の真の姿が描かれ、

これを見て初めて天の巧みを知ることができよう。

私が恐れるのは、

^{ひっこう}畢宏、^{いえん}韋偃のような昔の画工が、

死んで葬られて、骨はすでに朽ち果ててしまっても、

心はなお苦しみの中にいること——

「まだ画を極め尽くしていない、

もはや我が腕を揮うことができない、

我が思いを描き表せない」

そのような果たせぬ思いが墨の痕と化して、

この石に宿ったのか。

古来、画師は俗士ではないとされ、

物と現象を掴んで描き出そうとするのは、

詩人とはほぼ同じである。

願うのは、歐陽公が詩を詠んで、

畢宏、韋偃の二人の不遇を慰め、

幽明宮で憤りの余り泣いていないでもよいようにしてさしあげることだ。

(畢宏と韋偃は唐代の画師。「二人の不遇」とは、志を果たせずに引退を余儀なくされた歐陽脩のことをいうのであろう)

■ 潁州初別子由二首

蘇軾は潁州を発って杭州に向かい、弟は陳州に帰った。蘇軾、蘇轍、歐陽脩の3人の別れに際し、弟に向けて送った詩。

其の一

旅行く帆を西風に掛けると、

別れの涙が、清らかな潁水えいすいの流れへと滴り落ちる。

ぐずぐず留まろうとしても益はない——

わかってはいても、

いまこの瞬間の光景を惜しまずにはいられない。

我が人生において、

君との別れはかつて三度あったけれど、

この四度目が最も痛ましい。

思うに、君は父上に似ていて、

木訥ぼくとつにして、「剛ごう」かつ「静せい」である。

『易経えいききょう』にいうところの、

「良い人は言葉数が少ない」とは君の「静」、

「石のように固く、機智に富み賢い」とは君の「剛」である。

今に至るまで、天下の士で、

朝廷を去るに当たって君ほど勇猛であった者はいない。

僕は長らく「狂きやう」を病む者となり、

ぽっかりと大きな穴が開いているのにも気付かずに歩いていたようだ。

酔っ払って落ちてしまって、

幸いにも、醒めたら傷を負っていなかったようなものだったのだ。

これからは、暇を得た折などには、

黙って座って日を送るようにするつもりだ。

君がもう心配しないですむよう、

そのことをこして詩に詠み込み、

一日に三度は反省するようにするよ。

(今回は4度目の別れと言っているのは、蘇軾が鳳翔に赴いたのが1回目、蘇軾が鳳翔から都に帰り、入れ替わりに弟が地方官となって出て行ったのが2回目、そして弟が陳州の学校の教授に招かれて都を出たのが3回目であるからだ)

其の二

別れがすぐ近くに行くだけのものなら、
ことさらに表情を変えることもないだろう。
別れがひどく遠くに行くものなら、
涙が胸を濡らすであろう。
しかし、隣にいても会わないでいるのなら、
地球の表と裏にいるのと変わりはない。
人生に別離というものがなければ、
恩愛の重さを知ることはない。
僕が宛^{えんきゆう}邱に着いたばかりのとき、
君の子どもたちは僕の衣を引っ張って踊った。
その瞬間に、僕は別れの悲しみがあると知った。
だから、秋風が吹き過ぎるまではと、
君のところ^{こゝろ}に留まったのだった。
もうとっくに秋風は終わってしまい、
別れの恨みは窮まる^{きゆうまる}ところがない。
君は問う。
「いつ帰ってこられますか」
僕は言う。

「木星が東の空に見えるときだろうか」

天界の星は常に巡り巡っている。

別れと会うも常に巡り巡っている。

そして、憂いと喜びが常に攻め合っているのだ。

こうしてここまで詩を詠んできて、

僕は大きく長く嘆息する。

我が一生は結局のところ、

根がなくて風のままに飛ばされる蓬よもぎのようなものであるのだろう。

ああ、憂うのはもうよそう。

憂いが多いと髪が早く白くなってしまふ。

その最たる証拠として、

君も見るがいい、

ろくいちおう
六一翁がそこにおられるのを。

(宛邱とは陳州にある丘の名で、背の高い弟をその丘になぞらえて宛邱先生と呼ぶようになる。歐陽脩が若い頃から白髪が目立ったのは有名な話(第1章31ページ)。「根がなくて風のままに飛ばされる蓬」とは、中国の乾燥地帯に生える蓬の一種で、秋に地上部が枯れると根が抜けて風の吹くままに飛ばされる。寄り辺ない姿の「飛蓬ひほう」は、旅ないし人生の悲哀の象徴として唐代の詩に多用された。蘇軾はその「飛蓬」を、この詩以降、むしろ肯定的に捉えて用いるようになる)

■十月二日將至渦口五里所遇風留宿

都から遠く離れたからなのか、弟に会いさらに歐陽脩にも会ったからなのか、このころから蘇軾の詩は俄然生き生きとしてくる。

蘇軾の乗る船は潁水をしばらく下ってから淮河わいがに入った。淮河は、中国を北の華北かほくと南の華南かなんの二つの文化圏に分ける境界として認識されてきた大河川である。潁水と淮河の合流点かこうを渦口といい、10月2日に渦口から5里のところで風のために前に進めなくなった。

淮河に向かっていた間は、

久しく風がなく、流れのままに、

滑るような心地良さを存分に味わっていた。

今朝は、

雪を投げつけるような白い波が一面に立ち、

平野が狭まってきたと感じ始めると、

我が前に二つの山が立ち塞がった。

その間から吹き出てきた風のために、

川の水は吐かれるのか、呑まれるのか、ここで滞ってしまった。

桑の木の根元に船を繋ぎ、

ざぶんざぶんと波間に舞い続けて、

夜を明かすことになった。

船頭達は懸命に声を掛け合い、
草を^な縛っただけのような弱々しい綱を頼みとして、
どうにかこうにかしのごうとしている。

私は普段から偉そうに、
「憂患なんぞ何ものぞ、
奇怪なことにも驚くものではない」

と、言っていたので、
鬼神どもは私をこの危難に置いて、
「ぐう」と言わせてやろうと、
このような戯れを仕掛けてきたのだろうか。

どれどれ、
^{かめ}瓶の中にはまだ酒があったはずだ。
酒があるのなら我が運も尽きはしない。
それが今夜の結論である。

■出潁口初見淮山是日至寿州

風が止んで淮河に入り、船はゆるゆると進んで寿州^{じゅ}に至った。

我が旅は、
^{ちやうこう}長江へ、そしてその先の海へと、

日夜、向かいつつある。

河畔には、

かはで風の葉が赤く色付き、あし蘆の花が白く突き出し、

秋の感興は深まるばかりだ。

淮河の流れは平ら過ぎて、

天と水と、どちらが遠くどちらが近いのやら——。

彼方の青い山々の並びは、

船とともに高くなったり低くなったり——。

すでに寿州の白石塔はくせきとうが見えてきた。

それでも、船の棹こうぼうはいつまでも黄茅の岡の下にある。

波はなく風は軟らかく、

望み見てもなお到ることができない。

あの青くぼんやりとした夕靄の中で、

友は久しく立っていることだろう。

■寿州李定少卿出餞城東竜潭上

寿州では長官りていの李定らに歓待された（先に言及した李定とは別人）。竜潭りゅうたんという池のほとりでの宴で詠んだ詩。

カーカーと山の鴉からすが騒がしい——

神靈が宿っていそうなこの古い池。

竜潭の名の通り、

竜が吐いた息のような泡がぷくぷくと水面に浮き、

竜が吐いた涎よだれのような淀みが船のぐるりを取り巻く。

闇に潜む妖怪を照らし出すために、

犀さいの角つのを燃やすようなことはできなくても、

底に潜む竜を誘い出すために、

雀を焼くらしいことはしてみたいものだ。

長官が別れを惜しんで笛を吹いてくださると、

その音が近隣の村々に響き渡り、

猿たちが聴きに集まってくる。

いつの年かこの土地を訪れる人が、

猿にも及んだ長官の仁愛を讃えて歌うときには、

この池の魚にも聞いてほしいものだ——

長官がここで私と莊子そうじと同じような問答をしたということ。

(竜潭には何か怪異な雰囲気があったのだろう。犀の角や雀を焼くといった奇怪な伝承を織り込み、長官の徳を称え、宴席での楽しい挨拶とした。「莊子の問答」については次の詩を参照)

■濠州七絶

ごう

濠州では近くの名所を見て歩き、7首の七言絶句を詠んだ。3首を訳す。

ほうそ びやう
彭祖廟

いん しゅう
彭祖は殷と周の時代をまたがってその盛衰を見て、
亀と長寿を競った。

それでも、山中の雲母を仙薬にして飲んだのも虚しく、
三千年に一度だけ結ぶ西王母の桃の実は見られなかったのだ。

(彭祖は800歳まで生きたとされるが、それとて実を結ぶのに3000年を要する桃に
比べたらわずかでしかない。何事も相対的であると捉える蘇軾の物の見方がよく現わ
れている)

かんぎょたい
観魚台

ごく些細な点にこだわって同じであるか異なるかを吟味したら、
隣り合う肝臓と胆嚢だって、
楚国と越国くらいに大違いということになるだろう。

ことわり
万物は一つの理に帰るといことがまことであるのなら、
今僕が魚の楽しみを知ったことを君は直ちに知るのである。

けいし
(莊子とその友人の恵施が問答を交わした場所だとされた水辺に観魚台が設けられて
いた。その問答は、人は他者(人でも魚でも)の心の内を知ることができるのかとい

うことをテーマとした。荘子は知り得ると言った。蘇軾はこの詩で「万殊 一理ばんしゆ いちり きに帰す」（様々に異なる幾千万もの物も一つの原理から始まり、一つの原理に帰納される）という句で荘子の考えを肯定した）

ふざんどう
浮山洞

浮山洞は遠く東の海の底無しふざんどうの谷に通じていると人は言う。
底無しふざんどうの谷の上には波と共に五つの島が浮き沈みしている。
船に乗ってその島を見るなら、上がるやら下がるやらわかりようがない。
大地は水に浮き、水は空に浮いている。
そもそも物の浮沈など誰も知りようがないのだ。

■泗州僧伽塔

唐の初めの頃に、西方かの何国そうがから僧伽という人がきて仏教を広め、泗州しのあたりで亡くなった。その後、僧伽は淮河のほとりにあった仏塔の上に姿を現し、人々の様々な願いを叶えたので、僧伽信仰が盛んになり、僧伽塔などの大伽藍を連ねる大寺院がその地に作られた。

（蘇軾が泗州にきたのはこのときが2度目。これより5年前に、父と妻の亡骸を船に積んで故郷べんがに帰る途中にもきていた。そのときは都から汴河の流れに乗り、今回とは別のルートでここに至った）

私がかつて南へと旅し、汴河のここに船を繋いだ。
逆風が吹くこと三日、砂が顔に当たり続けた。
船頭達が「一緒に祈ってください」と勧めたので、
それに従って僧伽塔そうがに赴いたところ、
供えた香の火が消えないうちに、
帆柱に掛けてあった吹き流しの向きが早くも変わった。
船に乗り込み、わずかの間に、
振り返ると、泗州ちようきゆうの長橋はもう見えなくなっていた。
そして亀山きざんの下に着いたのはまだ朝飯前だった。
そのときは、私の願いを叶えてくれたと喜んだのが、
思えば、道みちを窮めた至人しじんは無心であるのだから、
誰かには厚く報い、誰かには薄くということはないはずだ。
田植えの時は人は雨を望み、稲刈りの時は晴れを望む。
行く人は追い風を喜び、来る人は向かい風を恨む。
もしも人それぞれの祈りを全て遂げようとしたなら、
造物主ぞうぶつしゅはあれもこれもと一日に千回も変化しなければならぬだろう。
今私は世の趨勢から遠くにこの身を置いて、
去るものを追うことも、来るものを恋い慕うこともない。
僧伽塔から先へと進むのはもとより願うところ、
しかし、留まるのも悪くはない。

ここに来る者があることに願いをかけられたのでは、
さすがの神だってうんざりであろう。
唐の澄観ちやうかんがここに営んだ塔を、
韓愈かん じゆは高さ三百尺と詩に詠んだけれど、
当時と今とでは姿が変わっている。
神の靈驗を信じようとしない俗物の私を嫌って、
塔の階段を昇らせてくれないということでなければ、
雲を載せた山が淮河の左右を取り巻く景色を一目見るとしよう。

■ 亀山

前の詩に「朝飯前に着いた」と詠まれたきざん亀山での詩。

我が生はゆらりゆらりと揺らくばかり——
どこに行き、何を求めようというのか。
再び亀山の前にくるまでの間に、
五年の歳月が流れ、
万里を旅し、天下の半分ほども巡っただろうか。
亀山に庵を営む僧は、
ひたすらここで寝起きをして老齡に至った。
都はすでに遠く北に地を隔てるところにまできて、

私はなおも海に連なる潮に乗って、
 東へ東へと游たびを続けなければならない。
 六百年余りの昔、
 南朝の皇帝は北朝の侵攻を防ごうと、
 ここに砦を築いたという。
 そのことを今誰が知り、
 砦の崩れ去った址はどこにあるのだろうか。

■ 発洪沢中途遇大風復還

淮河が長江に合流するあたりには多数の湖沼が存在する。洪こう沢たく湖で一晩
 停泊してから出帆したところ、激しい向かい風に遭って引き返した。

風と波がたちまちこのようになっては、
 私の旅の行く末は一体どうなることやら。
 とりあえずは、帆を掲げて西に戻るしかあるまい。
 そう決めたのは悪い選択ではなかった。
 洪沢湖までの三十里は飛ぶが如く――
 我が船が帰ってきたのを見て、
 「難儀でござりましたなあ」
 土地の人々が親しく労ってくれ、

酒を携えて売りにきてくれる者もいる。

この人情の温かさは変わらずにあってほしいものだ。

酒を飲んで一眠りするとすでに夜半、

川岸の風の音は静かになりつつある。

ならば、明日はきっと淮陰^{わいいん}県にまで行けるだろう。

そこの市場に、名産の肥えた白魚^{しらうお}が出ているに違いない。

我が行はもとより南も北もなく、

たまたま意に合ったところが行きたかったところなのだ。

波が澎湃^{ほうはい}と押し寄せ、船の窓を終夜揺らしたところで、

心配することは何もない。

妻や子等にも憂いの様子はない。

さしあたり質^{しち}に入れられる衣類がまだ箱にあるのだから。

■十月十六日記所見

淮陰県を過ぎたあたりで、10月16日に見たままを記したという詩。

風が空高くを吹き、月が暗く曇り、

雲も水も黄色味を帯びていた。

淮陰を夜に発ち、山陽に着いたのはその翌朝。

細かい雨のような暁の霧が漂い、

朝日が出て光は弱く寒々しい。

霧が巻き上がって雲の内に収まったのはすでに正午の頃、

北からの冷たい風が、人を押し倒さんばかりに吹き出し、

たちまち窓にばらばらと音がして雹が落ちてきた。

突然のことに人々は避ける間もなく、

市場はひっくり返るような騒ぎで、

売り物があちらこちらに乱れ飛ぶ。

そこに雷が、壁を崩さんばかりに一発鳴り響き、

それで事が終わった。

「今夜一杯いかがでしょうか」

県知事さんからのお迎えが呼びにきてくれて、

宴席の座が定まると、

折よく夕日が射し込んで廊下を明るく照らし出す。

百種の変異、怪異もすっかり消え去って、

全てが夢ではなかったかと疑われる。

人々は言う。

「竜が古びた穴に飽きて、全部の魚を引き連れて移って行ったのでありましょ」

それは何の兆しなのか、黒か白かと論じ合うのだが、

我等愚かな儒者は揃いも揃って無知であるから、

經典の文句を好き勝手に引用して言い募るだけである。

その中で、ただ県知事の言葉だけは用いるべき価値がある。

「寒くなり、雪が降るようなこの時候には、

まさしく何もよりも酒がよいとの徴しるしでありましょうな」

■広陵会三同舎各以其字為韻仍邀同賦

広陵こうりょう（揚よう州）に着くと、州知事のせんこう ぼ錢公輔が蘇軾と気の合いそうな3人を呼び集めてくれたので、1人に1首ずつ詩を贈った。

第一首は劉放りゅうはん あざな こう ぼ（字は貢父）について詠んだ。かつて劉放が都から出て行ったときに蘇軾は送別の詩を詠んでいる（本章80ページ）。

劉貢父

去る年に都で貴公を見送った際に、

貴公と私の酔っての言葉は、

人々を驚かせたものだった。

今や二人とも漂泊の身となり、

筆硯の世界に遊ぶのもままならない。

我が命運は天の定めによるのであろうか。

古いにしへの弓の達人も己の技だけで必ず的を射抜いたのではなかったと聞く。

詩を作って思いを晴らそうとしても、

誹そしりの声が物憂くてならない年齢になってしまったようだ。

孔子は、若い者はとかく雄弁を誇りたがると、
 口先ばかりが達者な弟子を常に叱っていた。
 矢で一度翼を傷付けられた鳥は、
 飛ぼうとしても前の痛みを念ってしまうという。
 広陵で貴公とこしして三日飲み続け、
 全てが夢のように思えてくる。
 誉れ高き州知事のもとで、
 良い酒を酌んで早くも春の心地がすればなおさらだ。
 互いに手を振って入り江で別れる時がきて、
 羨ましく思うのは、
 貴公が都を去って以来ここで安閑としていること。
 私が行く杭州は、どうも何かと騒がしいらしい……

次はそんしゅ孫洙（字はきょげん巨源）について詠んだ詩。劉攽とは対照的に孫洙は無口
 だったようだ。

孫巨源

三年の間、私は都にいて、
 その時の憔悴ぶりときたら、
 今思うと、言いようがないくらいだった。

都の街路に舞う塵の中でびっしょりと汗をかき、
ふらふらと馬の歩みに任せるばかりのこともあった。
人というものは付き合いの良さをとかく貴ぶので、
少しばかり同調しないだけでも恨みを生じてしまう。
昔からの友人でさえ、
私には近付かないようになってしまった。
南にきて、気持ちは実にからりとして、
ただ一緒に語る相手がいないのを残念に思っていた。
広陵の町で、こうして劉君や孫君に会えるとは、
思いがけないことであった。
仲間のように見えても、
いささか趣が異なれば一緒にはいりくいもので、
例えばオランウータンとチンパンジーはそうなのだろう。
我々のここでの集いを長く続けると、
疑われて排斥されることになりかねないのを恐れる。
私は偏屈であるが、貴公にはこだわるところがない。
違いはあっても、交わりを断つということにはならない。
私はさらに南東に向かうけれど、
ほんのしばらく貴公と離れるだけのことである。
（ここでオランウータンとチンパンジーと訳したのは王孫と猿。王孫は猴の別名で、

猴はおとなしく、猿はさわがしく、両者は同じ山にはいられないとされた。明らかに改革派と非改革派についていつている。都を離れて気の合う人々と自由に語り、自由に詩を詠めることを蘇禪氏は何よりも喜んだのだ

次は劉摯（字は莘老）^{りゅうし しんろう}について詠んだ詩。

劉莘老

ここ広陵でかつて会ったときは、
 貴公は地域の重要な職務を勤めていた。
 二度目に皇城で会ったときは、
 貴公は堂々とした高官の衣服を身に付けていた。
 そして三度目に会った今の貴公は、
 都落ちの境遇にある。
 朝には、雲の峰の高いところであって、
 宰相と席を一つにするほどであったのに、
 暮れには、水のほとりに追いやられてしまったのだ。
 しかし、貴公は喜びも怒りも見せることなく、
 真に「できる人」というべきである。
 士^したる者は、
 元来田園に在るべきであって、

世に出て用いられようとするの大いに誤るものなのだ。

まじないに使う草で編んだ犬を見るがよい。

草の犬は飾り立てられていい気になっているようだ、

まじないが終わってしまえば道ばたに捨てられ、

人々に踏みにじられるのである。

さあ、もう年の暮れは近い。

故郷に帰って耕作を始めるによい時期である。

■遊金山寺

蘇軾は 11 月初旬に長江を渡って南岸の鎮江^{ちんこう}に到着した。鎮江には、鎮江三山といわれる名所があり、まず金山^{きんざん}に登った。

我が家があるのは、

長江の水が初めて源を発するあたり——

官界に遊ぶ身となり、

長江の水が海に入るのを見送るようにしてここにまで来た。

聞くところでは、

海からの潮が遡るときには高さが一丈ほどにもなるという。

冬の今は川の水位が下がっている、

砂の上に流れの痕跡が認められるだけだ。

天下第一の名水とされる中^{ちゅうらいせん}冷泉があり、
その南側を囲む石の盤は、
昔から波濤に従って見えたり見えなかつたりしている。
金山の絶頂に登り、
試みに郷里の方角を見る。
長江の南側も長江の北側も、
ただ青い山が連なっている。
旅愁に駆られ、
夜になるのを恐れて陸に帰る船を尋ねる。
山の僧は、
「せっかくですから、落日を御覧なさいませ」
とねんごろに引き留める。
日が長江の彼方へと沈み行くと、
わずかな風によって、
皮革の皺のような細かな波模様が、
何キロにもわたって広がる。
空には、無数の千切れ雲が、
魚の尾のように赤く染まる。
細い新月に薄暗い^{かげ}魄が伴い、
その月もじきに落ちてしまうと、

天は漆黒の闇となる。

その時に、

長江の中央に松明たいまつのような明るい何かが生じる。

飛ぶばかりの焰が山を照らし、鳥を驚かせる。

寺に戻って床に伏せると、

あの火が何であったのか、

心に納得できるものがなく、

思案の余り嘆息する。

鬼が為したのではなく、

人が為したのではなく、

ついに何物であるのか。

金山より見る川と山はこのようであるのに、

自分は郷里の眉山びざんに帰ろうとしていない。

だから、長江の神が異変を示して、

自分の頑かたくなな心を驚かせようとしたのだろうか。

ならば、私は江の神かわに謝ろう。

「ただ食うためにやむをえずこうしているのです。

暮らすに足るだけの田がありながら、

もしも帰らないでいるとしたら、

誓って、長江の水を全部飲み干してみせましょう」

(金山の高さは44メートル。新月の魄^{はく}とは、地球からの反射光で月の暗い部分がうつすら見えるのをいう。夜の川の中央に現われた焰の正体は不明だが、蘇軾は見たままを詠んだと添え書きをしている)

■自金山放船至焦山

金山から船^{しょうざん}で焦山に渡った。

金山の楼観は堂々として奥深く、

鐘を撞き、太鼓を打つと、

向こう岸の淮河南方一帯に響きわたる。

私は金山に泊まり、

ここにまできていながら焦山に行かないのでは、

我が心に恥^しじねばならぬと思うようになり、

焦山には何があるのかと尋ねた。

「そうですね、立派な竹がありますか。

それと、薪を採ったり、水を汲んだりする僧が二、三人ばかりいますか。

しかし、雲から土でも降りかねないようなこの空模様、

しかも川波が高く、

船で焦山に渡る者など誰もおりません。

せいぜい川^{なりわい}べりで生業を営む人々が、

春の蚕がよく育つようにと祈りに行くくらいでありますか」
それを聞いて、
一緒に金山に遊んだ人々は、
もうこだけで十分だと言ったのだが、
ならば、私だけでも行こうと決意したのだった。
お上の勤めを為して、それに報いがあるかなかるうが、
川を渡り湖を渡る労を断じて厭うものではない。
まして自分で行きたいと思うところなのだ。
朝、私は船を雇い、金山を発った。
風はなく、自ずから波が湧いて、我が船を後押ししてくれる。
流れの中ほどで船歌が湧き、
酔ったような心持ちでその声を聞く。
山から老いた僧が一人下ってきて、
「なんとまあ、こんな日に、客人がこられましたわい」
驚きつつ出迎えてくれる。
老僧と話すうちに、笑って喜び合うのは、
いつの間にか二人とも郷里のなまりになっていることだ。
老僧は言う。
みろくぼさつ
「久しくここでは弥勒菩薩様とだけ一緒に過ごし、
郷里のことなどすっかり忘れておりました」

腹がぐちくなるほどではなくとも、
もてなしてくれた山の食べ物は旨く、
紙を突っ掛けただけの夜具でも、
疲れていたので暖かくぐっすり眠れる。
かくして別れの朝に、私は老僧に言う。

「山林に生きて飢えに苦しむのは昔からありますよ。

田がないから身を退くことができないとの言い訳をして、
実のところは俸禄を貪るような人間ではないと思っております。

その昔、三回左遷させられ、ついに職を辞した人がいましたけれど、
その回数には、私はまだ達していません。

その昔、七つの耐えられないことを挙げて職を辞した人がいましたけれど、
それくらいの数なら、私にはもうすでにあります。

行く行くは官服を自ら脱ぐ時がきつとくるでしょう。

どうか私のために、

庵を立てるによい場所をこの山の中に残しておいてください」

■甘露寺

焦山からさらに北固山ほくこにある甘露寺かんろに行った。

長江があって、山もあるのなら、

結構でなかるうはずがない。

好風景であるだけに、一人だけで遊ぶとなると、

気持ちが昂ぶり過ぎてしまいかねない。

ともに行く人がいるのがよいだろう。

必ずしも平素から歓びを共有する相手でなくともよい。

甘露寺に行こうとして、

官職に就いている方々には暇を持て余している人がなく、

面識のない二人ではあったけれど、

喜んで鞍を並べて北固山に向かうことになった。

古い歴史のあるこの山は、

そのまま一つの城のようになっていて、

階段が層を成して山を巡り、

朱色の欄干がぐるぐる巻きになっている。

その先端で大地が窮まって断崖となり、

その上に楼台が立ち、

楼台の尖端の一点の上から大空が広がり、

空の下に水が広がっている。

楼台から一覽するなら、

数州を呑むばかり、

山が長く連なり、漫漫と川が流れる。

対岸を望み見ると、

霧の彼方にぼんやりと竿のようなものがあるのは大明寺だいめいであろうか。

甘露寺の庭には、

羊が伏すような弓なりの岩がある。

ここでかつて劉備りゅうびと孫権そんけんが会ったという――

遙かそのとき、

諸葛孔明しよかつこうめいは策を胸に劉備を助け、

たった一言用いただけで孫権を納得させ、

二言用いただけで曹操そうそうを敗走させた。

諸葛孔明の名は高く、

心に想わせるものは多くとも、

事はすでに去り行き、

目に見える形で留まっているものはない。

巨大な二つの鉄の釜があり、

これは梁の武帝りやうぶていが寄進したものだという。

百斛ひやくこくの水を湛えて、皇帝の威信を示したそれも、

長年の雨にさらされて錆びて腐りかけ、

虚しく向き合っているだけである。

周代の巨大な青銅かなえの鼎も川に沈み、

漢代の巨大な銅さらの盤も土に埋もれ、

山や川でさえもとの形態を失っているのに、

甘露寺のこの鉄の釜ばかりがなぜ今も残っているのだろうか。

(この後に、晋の張僧繇しん ちやうそうようが描いた菩薩の画、南斉の陸探微なんせい りくたんびが描いた猿の画、唐の李徳り とく

裕ゆうの肖像画についても詠んでいるが、あまりに煩瑣なので省略する。そして、諸葛孔明、孫権、梁の武帝、唐の李徳裕の4人は英雄であるとして、次に進む)

四人の英雄は皆竜であり虎であって、

その残した痕は今もくっきりと残っている。

四人が活躍した時代は争奪を専らとして、

安んじられるときは少しもなかった。

興廃は造物主の手の内にあり、

世の移り変わりについて、

誰かがおざなりに言えるようなことはない。

昔も今も大きな法則は変わらない。

ところが、凡庸な者に限って、

難しい事を為そうとする。

昔の英雄に遥かに及ばない後世の凡人は、

徒いたずらに辛酸を嘗めるばかりである。

古いにしえの琴の名手は、

久遠の時間の推移を想わせて人を泣かせたという。

その音を聞かずとも、

かつて阮籍げんせきが無限の思いを込めて、

「もはや英雄はいない」

と叫んだのに声を合わせて、

私は深く慨嘆せずにはいられない。

(阮籍は本章 80 ページでも言及されている。阮籍が「もはや英雄はいない」と叫んだのは楚の項籍こうせきと漢の劉邦りゅうほうが争った古戦場でのこと。改革に反対する人々が皆去ってしまった都にはもうひとかどの人物は残っていないという思いから阮籍の故事を引いたのであろう)

(弟と別れて以降の一連の詩から、杭州でいかに振る舞うべきか、心の内に見定めるものがあつたと推測することができようか。いま以上に不本意なことがあれば、いつでも故郷に帰るとの気持ちで杭州に着任したのであろう)